續天路歷程

The Pilgrim's Progress

PART II

78
55

98-

THE PILGRIM'S PROGRESS.

PART II.

JOHN BUNYAN.

Translated by KŌKI H. IKE.

續天路歷程

ヂョン、バンヤン作

池亨吉譯

東京 基督教書類會社

明治 42 2 10 交付

No. 155. Second Thousand.

續天路歷程

緒言

續天路歷程はバンヤン出獄後の作なり。之れに對しては世既に定評の存するあり、敢て余輩の云爲するを用ひず。其の前編に比して聲價の甚だしく揚がらざるが爲めに、或ひは稀に之れをバンヤンが作にあらずと難ずる者あるも、是れ唯だ事を好む者の言に過ぎず、實は何人と雖ども之れに於てバンヤン獨特の音色を聽取せずんばあらざるなり。チーヴァー博士評して曰く、「夫れ失樂園の作無かつせば、人は一に復樂園を稱揚して以てミルトンの天才を傳へたるべく、爾く續天路歷程を以てバンヤン唯一の著書たらしめば、其の聲價必らず今日の如くならずして、或ひは前編に比肩すべき者ありしや未だ容易に圖り難し。前編に現はれたる人物は余輩をして直ちにルー

ヲル、パウロの如き超凡の徒の人格を忍ばしむるも、後編に於ては余輩と水平線を等しうせる普通の人物を列叙し、却つて余輩をして多く親炙の思ひに堪へざらしむ」、と。蓋し至言と云ふべからん。余曩に前編を飜譯し、今また之れを成すを得たり。

"Go now, my little Book, to every place,
Where my *First Pilgrim* has but shown his face,
Call at their door: if any say, *Who's there?*
Then answer thou, CHRISTIANA *is here.*"

著者其の序歌に於て此の言あり。余も亦之れに倣ひ敢て憚かることなく之れを江湖に薦む。

乙巳秋十一月

譯者　ふるす。

目次

發端……一頁
第一程……二八
第二程……四六
第三程……八〇

第四程……一〇一
第五程……一四二
第六程……一六六
第七程……二二五
第八程……二四二

挿畫目次

主の使は愛の手を擧げて
懇ろに人の心の戸を叩く……一五頁
慈悲慈善の名は麗はし
心より之を求めて行ふ者は稀れ也……一二五
何を着、何を食はんと
思ひ煩らふ節も無し……一四八
大勇　勇を奮つて
異端の敵を屠る……一六四

續天路歷程

ヂョン、バンヤン作
池亨吉譯

發端

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
天つ御園の春をしぞ思ふ。

慇懃なる同伴者等よ、先つ頃、我れ基督信者と云へる旅人のこと、並びに其の人の天つ御國に向ひつる危ふき道行に就きて我が夢見たる節々を語りしことなるが、そは卿等に取りては益ともなり、また

身に取りては樂しきことにて有りつるなり。其の頃、我れ又彼の人の妻と子供等のこと、さては其の妻子が共に旅立つことを厭ひぬること、夫れが爲め彼の人の甚く困せしこと、さりとて來らんとする滅亡の危難の恐ろしさを思ひては、到底も諸共に滅亡の城下に止どまることを得せざりしこと、されば こそ其の頃卿等の見られしやうに、彼の人遂に其の妻子を見捨てゝ立ち去りぬる事など、次第を逐ふて語りしことなり。

さても、其の後ち世の事わざの繁きに紛れ、彼の人の立ち出でぬる里のあたりには、打ち絶えて歩みをも運ばざりける程に、後に殘されし彼の妻子が身の上につきても、更に尋ねべき便宜とては無かりしが、さるにても此の程さる事のありて再たび彼處に下り行き、さて里近き唯或る森の中に宿りを定め、暫し休らひ眠るとて我れ再た夢を夢見てけり。

かくて我れ夢の中に、一人の品尚き老人ありて、我が休らへる邊りに近づき來るを見たり。且つ其の行方の幾はどか我が道筋と同じかりければ、我れ頓て起き上りて其の人に連れ立ちぬるやう夢心地に覺えてけり。さて行く〳〵交互がはりに話しを續けしが、何時しか談しは彼の基督信者と其の旅路の事に及びけるに、我れ先づ老人に向ひ、「君よ、此の道の左り手に當りて、あれなる麓に見ゆるは如何なる里ならん」、と云ふ。

其の時明智翁（是れ彼の老人の名）の云へるやう、「あれこそ滅亡の城下とて、住民夥多しけれども其の境涯頼母しからず、去かも其の民こと〳〵く懶惰たる處なれ」。

「さては我が思ひに違はず彼の城下にて在りつるか、彼處ならば先きに我身も親しく通りつることあるに依り、今卿の云はれし事の眞實なる由も辨まふるなり」。

明智、「げに眞實なるぞ憂たてき、我身は此の里人の事を善く云はんとこそ眞實に思ふものを」。

「さては卿は情深き方にて、何事にまれ善を云ひ又善を聞くを樂しまるゝと覺ゆ。それに付けて承はりたきは、先つ頃彼の里より（其の名は基督信者と云ひて）一人の男の天國さして旅立ちぬることあり、卿は其の事を聞かれつるにや」。

明智、「聞きつるかとや、然なり、彼の男の事は元より、其の道中にて出あひぬる艱難辛苦、或るは戰かひしこと、捕らはれの身となりしこと、或るは泣き叫びしこと、呻き唸りしこと、また凄まじかりしこと、恐ろしかりしことなどに就きても聞きつるなり。且つ又卿に告ぐべきは、我が國中擧りて其の噂さをなし、彼の男の身の上や其の爲しつることなどは、およそ遍ねく知れ渡りて、孰れも其の旅日記を得んと求むることなり。げにや我れ思ふに、其の辛らかりし旅路こそ、却つて道を慕ふ多くの者を興しぬる樣子なり。彼れ未だ此の地に在りける頃は、皆な人之れを馬鹿者なりと罵りしが、去りての今は却つて賞め囃やさるゝなり。其れも然る事にて、彼れは今最と樂しく暮し居ると云ふことなり。さればこそ、斷じて彼れが如き危險は冒すまじと決心せる人々すら、猶ほ彼れが身の上を羨やみて、其の口垂涎を催ほす計りなりと聞く」。

「人々の爾か思へるは道理なり、元より彼れは今生命の泉の邊りに住居して其の中に生き、悲嘆なく骨折なくして、無くてならぬ物を得、絶えて憂れひ憤ふるべき事だになし。そは兎も角、人々の噂さをも語り聞かされよ」。

明智、「噂さや、まことに人々は彼の男に就きて珍らしき噂さを仕合へるなり。或る人々は彼れ今や白妙の衣を着、其の頭に黃金の鐲を懸け、その首には眞珠を鏤ばめたる黃金の冠りを頂き居れりと云

ひ、また或る人々は、彼の曩きに道中にて現らはれし輝やける者達、皆な彼處にて彼の男と親しき友垣を結び、之かも隔てなき隣り同士の如く睦み居れりと云ふなり。其のほか、處の主既に彼の男に豐けき富と樂しき居宅を賜はり、彼れは日毎に其の大庭に在りて飲み食ひし、また王と共に往來して之れと語り、また審判の權威を有てる者にも、親しく微笑をもて迎へられ、厚く其の眞情を蒙むり居る事などは、何人も疑がふところに非ず。且つ又、處の主なる公やかて此の地に臨み給ひ、曩きに彼の男の旅立ちしける時、淺ましくも之れを輕しめ嘲けりたる者たちに向ひて、必らず申し開きを求めらるるならんと思ひ設くる人達もあり。げに今や彼の公の愛情愈よ彼の男の上に加はるに連れて、其の昔し基督信者が旅立ちしける頃、之れに加はへられたる恥辱を看過しにせんこと、彼の王の忍び給ふ處にてあらざりしなり。是れ元より訝しむべきことに非ず、そは彼の

(ハ)撒加利亞三ノ七、路加十四、十五、
(ニ)撒多書十四、十五、
(ホ)路十ノ十六、

男有らゆる憂き目を忍び、眞の愛をもて彼の公の爲めに盡しつればなり」。

「こは最と喜こばしき話にもあるかな、我身は彼の人が其の勞苦を終へて平安を得たること、また彼れが涙ながらに播きぬる種を、今ぞ歡喜をもて豐かに刈り收むること、さては彼れを惡む者より遁かに遠ざかり、また其の敵の矢玉も今はとゞかざる處にまで達しぬる事などにより、甚く彼れの爲めに喜こぶなり。且つまた、斯かる事の噂さ此の國中に廣まり傳はるをも喜こぶなり、誰れか其れに依りて善き實の結ばるべきを思はざらん。さて、君よ、今しも思ひ浮べぬるにつけて承まはりたきは、彼の人の妻子が身の上の事なるに、あはれ如何にか爲り果てぬると思ひやらる、何卒其の事をも語り聞かされずや」。

(ホ)默示十四ノ十六、
(ヘ)詩百二十六ノ五、六、

明智、「誰れの事とや、基督女信者と其の子供たちの事を聞きたし

とや、されば偖て、彼の者ども、基督信者が爲しつる通り旅の支度を整のへ、今や擧りて彼れの跡を慕ひ行くなり。さるにても初めには基督信者の懇願にも涙にも服することなく、却つて愚かなる擧動を爲したりしが、去かもつくづくと思ひ慮りて、訝しうも其の心を悛ためたり」。

「そは此上なきことなり、されど彼の妻も子供たちも皆な打ち揃ひて云はるゝか」。

明智、「然なり、我身は丁度其の場に居合はせ、事落ちもなく見聞きしたるにより、此の事ならば委しく卿に語り得るなり」。

「かくては其の眞實なること云ふ迄も無からん」。

明智、「元よりなり、げにや彼の婦人も其の四人の子供たちも、皆な打ち揃ひて旅立ち仕ける事なるが、さて卿と暫し連れ立ち行くべきまゝ、我れ其の話を卿に語るべし。

さるにても基督女信者は、(是れ彼の婦人が其の子供たちを打ち連れて、旅人となりける其の日より名乘りし名なり)、其の夫の名殘なく彼の大河を越え了りて、今は再び見ぬ世の人となりてしより、漸やく其の心中穩やかならず、先づ愈よ其の夫を失なひぬること、さては其れと共に兩人が仲の愛の緣も絶えぬるやなど思ひて、千々に心を碎きてけり。まことや彼の人我れに告げて云へることあり、「自然は屢々切なる物思ひを生ける者に送りて、失せぬる者の愛の緣を偲ばしむ」、と。さるからに此の婦人も其の夫を忍びては盡きせぬ涙に咽びつるなり、去かのみならず、此の頃は自から深く省りみて、曩きに其の夫を頑强く持てあしらひたること、もしや此の別離の原因となりしには非ざるかと思ひ惑ひ、さては其の當時の不親切なる仕打ちや、道ならぬ持てなしや、また無慈悲なる擧動やなど、忽ち其の心に群ら立ち浮びて、其の良心之れが爲めに惱やみ、また自か

らの罪深きを覺え初めつるなり。且つ又、此の婦人は其の夫が斷えず呻めき苦しみ、涙を流して悲嘆に呉れたること、また其の旅路に連れ立ち行かんとて、優しくも勸めつ願ひつせらるゝほど、彌よゝ自からの心を頑くなに爲しつること、さては其の夫が重荷の姿に打ち萎れつゝ、語りもし云ひもし爲つることの悉く電光のごとく肝に徹へしこと、別しては、「あゝ我れ救はれん爲めに何を爲すべきか」、と然も悲しげに打ち哭きぬる夫の聲の、最とゞ傷ましくも其の耳に響きぬる事など、獨り思ひつゞけて一としほ心を痛めたり。

さる程に其の子供たちを膝近く集へて、「さて子供たちよ、我らも等しく詮方盡きたり、卿等の父上は早や逝かれぬるに、我身は淺ましくも其の望みに背きて連れ立つ事をも爲さず、猶ほしも卿等の行末をさへ妨げたり。かくて淺からぬ罪を重ねしことの口惜しさよ」、と云ひ出でけるに、子供たちは忽ち涙に咽せ返へりて、いづれも父の跡を慕ひ行かばやと打ち泣きたり。其の時基督女信者は言葉を繼ぎ、「さるにても、初め我身は卿等の父上が舉動につき、之は定めし何事にか逆上して、其れが爲め端なき憂ひに沈めるならんなど、淺ましくも思ひ測りしことなるが、今となりて考ふれば、それこそ我身の思ひ違ひにて、全くは生の光と云ふ者を得られしにより、さばかり物狂はしくも擧動はれしと覺ゆ、げに其の光明に依りてこそ死の圈套をも脫かれ給ひしなれ。あゝ、あゝ、かの時諸共に連れ立つことを爲したらんには、實に如何計りか便よきことにて有りつらんを」、と云へば、子供たちも、「あゝ幸薄き身にもあるかな」、とて又さめ〳〵と打ち泣きたり。

（ヨハネ八ノ十二、ヨハネ十二ノ四十七、ルカ十八ノ十三）

さて其の翌の夜、基督女信者一とつの夢を見てけるが、見よ、一個の巾廣き卷物その前に開らかれ、過ぎ越し方の見惡き罪過など歷〻と其の上に書き記されたるに、忽ち眠れるまゝに聲を放ち、「主よ

罪人なる我れを憐れみ給へ」、と打ち叫びて、其の子供たちの眠りをも驚ろかせたり。

其れに次ぎて兩個の惡鬼とも覺しき者その枕邊に立ち、「さて此の女人をば如何にかせん、醒めても眠りても主の憐れみを乞ひ叫ぶならずや。かくて其の儘に爲し置かば、先きに彼の夫を取り逃がしつるやうに、また此の女人をも失なひなん。今の內何とか一と工夫を凝らさずば、やがて旅人の數に加はりて取り返へしの付かぬ事となりぬべし」、と語り合ふを見たり。

其の時汗も玄と丶になりて目を醒まし、暫しは身震ひして居たりしが、漸やくにして又打ち眠り、此度は其の夫基督信者の、數多の天人に圍まれ、寶座に在りて其の頭に虹を戴だける者の大前に立ち、靜かに其の手に持てる縱琴を奏づるを見たり。また其の公の足もとに額づき平れ伏し、「我が主よ、我が王よ、此處に召し給へる恩惠を、

主の使は愛の手を擧げて懸ろに人の心の戸を叩く

CHRISTIANA'S VISITOR

'So she cried out to her visitor, Sir, will you carry me and my children with you, that we also may go and worship this King?'

[see p. 187.

其心より謹しみて感謝し奉まつる」、と云ふに連れて、之れを圍める者、手に手に持てる其の縱琴を彈き鳴らし、また人間の世には知られまじき妙へなる聲を揚げて、一齊に祝し呼ばゝるを見たり。

さて翌の朝、起き出でゝ、神に祈りし、また其の子供たちと暫し語らひ居たる折しも、誰れとは知らず戸をほと〳〵と打ち叩く者あり。其の時之れに向ひて、「もし神の御名に依りて來られなば入り給へかし」、と云ふに、其の者「アーメン」と云ひて戸を開き、「平安此の家に豐かなれ」、と挨拶す、また、「基督女信者よ、卿は我が來りぬる趣旨を知らるゝか」、と云ふに、婦人は稍や胸打ちさわがせ、さて何用にて何處より來れる者ぞと訝かしみ、顏打ち赤めて震ひ居たり。去る程に彼の者更に言葉を繼ぎ、「我れは秘密と名乘りて高き處に住む者の一人なるが、さるにても我が住める處にては、此の頃卿の噂さ高く、卿が彼處に來ることを願ひ居るげに見受けらるゝ由、且つは

主の使は愛の手を擧げて熱ろに人の心の戸を叩く

CHRISTIANA'S VISITOR

'So she cried out to her visitor, Sir, will you carry me and my children with you, that we also may go and worship this King?'

[see p. 187.

眞心より謹しみて感謝し奉まつる」、と云ふに連れて、之れを圍める者、手に手に持てる其の縱琴を彈き鳴らし、また人間の世には知られまじき妙へなる聲を揚げて、一齊に祝し呼ばゝるを見たり。

さて翌の朝、起き出でゝ神に祈りし、また其の子供たちと暫し語らひ居たる折しも、誰れとは知らず戸をほと〳〵と打ち叩く者あり。其の時之れに向ひて、「もし神の御名に依りて來られなば入り給へかし」、と云ふに、其の者「アーメン」と云ひて戸を開き、「平安此の家に豐かなれ」、と挨拶す、また、「基督女信者よ、卿は我が來りぬる趣旨を知らるゝか」、と云ふに、婦人は稍や胸打ちさわがせ、さて何用にて何處より來れる者ぞと訝かしみ、顏打ち赤めて震ひ居たり。去る程に彼の者更に言葉を繼ぎ、「我れは秘密と名乘りて高き處に住む者の一人なるが、さるにても我が住める處にては、此の頃卿の噂さ高く、卿が彼處に來ることを願ひ居るげに見受けらるゝ由、且つは

又、卿が先きに夫に逆らひて自からの心を頑くなに爲しつることを後悔し、併せては、此の幼なき者らをも留め置きて、愚昧なるさまに爲し果てんことを憂れひ居る由、もつぱら傳へ囃やさるゝなり。

さて、基督女信者よ、憐れみ深き神、今や我れを使はして卿に其の聖旨を告げらる。げに神は不義を赦すことに吝かならず、玄かも數多度び之れを許すことを喜こびて爲し給ふなり。神また卿を其の大前に召して饗應の席を設けられなんとす、卿は彼處にて其の家の肥えたる物、及び卿の父ヤコブの產業をもて豐かに持てなさるべし。

彼處には卿の夫なりける基督信者も、多くの朋輩らと共に打ち交り、かの之れを仰ふぎ見る者に生命を與ふてふ其の御顏を、ところへに仰ふぎ見つゝ暮らし居ることなるが、卿愈よ天父の家の闕に達し、之れを越ゆる卿の跫音鮮やかに彼の人々の耳に響かん時、あゝ、その喜悅や如何ばかりなるべき、げに別けても卿の夫は如何にか喜こばるゝことならん」。

基督女信者は之れを聞きて甚くも羞らひ、唯だ差しうつむきて在りけるに、彼の客人は言葉を進め、「基督女信者よ、茲に又卿に進らすべき一通の手紙あり、こは卿の夫の王なる君より賜はる者なり」、と云ふ。されば婦人は之れを受けて恭うやしく開き見るに、其の香味妙へに馨はしくして宛ながら甚貴き香膏の如く、玄かも其の文字ことゝく黃金もて記されたり。さて其の手紙の趣むきと云ふは、彼の夫基督信者が爲しつるやうに、此の婦人をも爲させまほしきこと王なる君の聖旨にて、まこと天の都に到り、限り無きの喜樂を得て王の前に棲まんと思はゝ、此の外更に途なきよし書き認ためありければ、婦人は讀みも得果てず其の心地へ難うなりて、かの客人に向ひ、「あはれ君よ、何卒我れと我が子供たちを連れ行き給へ、我らも彼處に到りて主大君を拜みまつらん」、とて泣き出でたり。

四九〇五　詩百十

其の時秘密の云へるやう、「基督女信者よ、苦は樂の種と云ふならずや、卿も彼の天城に到らん爲めには、數多の難儀に出遇ふべき筈なり。さるにても先づ卿の夫基督信者が爲しつるやうに、卿も急ぎ立ち出でゝ彼の野原を越え、卿が守るべき道の入口に立てる彼の片折戸に向ひ行かれよ。また此の手紙を確と懷中に納め、行く〳〵讀みて自から慰さめ、また子供たちにも讀み聞かされよ。此は旅の家にて卿が必らず歌ふべき歌の一つにてもあり、且つは旅路を終りて彼方の城門に達せん時、手渡しすべき通行劵ともなれば、必らず心の底ふかく根ざすまで讀み味はふことを努められよ」。

さて我れ夢の中に見けるに、かの明智翁は是處まで話し來りて忽ち自から感動し、暫し言葉も中絶えたりしが、漸やくにして我れに復へり、また其の物語りを續けてけり。

さる程に、基督女信者は其の子供たちを膝下に集へ、さて其の心のうちを說き出でけるやう、「あはれ我が子供たちよ、見らるゝ通り、我身は卿たちの父上の死なれしことにつき、此の頃甚く思ひを苦しめ居ることなり。其の旅路に連れ立つことを否みて、我身のみかは卿たちの心をも頑くなになし、かくして父上の胸を痛めつることを思ひては、實に身も世も有られぬ心地す、且つ又、我身や卿たちの境涯も、生れつき最と傷ましき者なるを思ひ悟りて、一としほ憂ひを催ぼすなり。

かく憂き節に思ひ惱みては、我が玉の緒もやがて絶えなん計りなるに、さるにても昨夜一とつの夢を見、今朝また此の客人の訪づれを受けて、我が心端なくも勵まされぬ、されば進みて天つ御國に到り、卿たちの父上にも相見え、また多くの善き友人等と平和の中に棲まはん爲め、先づ彼の片折戸とやらんへ向ひ行かんと思ふなり。さらば、子供たちよ、いざ諸共に旅の支度を急ぐべし」。

其の時子供たちは母の心の慕へる處を知りて、皆な喜こび打ち泣きたり。かくて孰れも旅立の用意を始めける程に、客人も今はとて暇乞ひして去り行きけり。

やがて愈よ出立せんと爲しける折しも、基督女信者の隣り人なる兩個の女此の家に來り、其の戸口に立ちて音なひたり。されば先きにも爲しつるやうに、「もし神の御名によりて來られなば入り給へかし」、と云ふ。之れを聞きて彼の兩女は一と方ならず驚ろき呆れたり、そは斯かる語は此の人々の耳馴れざる類ひにて、之かも基督女信者の口より之れを聞かんとは思ひも寄らざりしことなり。さりとても兩女は内に歩み入りしが、こは如何に、彼の婦人の今しも家出を爲さんずる有樣なるを見て、又もや呆れ驚ろきたり。

されば兩女の云ひ出でけるやう、「隣り人よ、此は抑も何たる仔細ぞや」。

其時基督女信者は年長なる臆病夫人に向ひ、「我らは之れより旅立たんとする處なり」、と云ふ。（そも此の臆病と云へるは、彼の困難峠の頂上にて基督信者に出で遇ひ、獅子の危難を恐るゝとて彼れを誘なひ返へらんとせし者の娘なり）。

臆病、「さりとは如何なる旅立ぞや」。

基女、「げにや、我が夫の跡を慕ひ行かんとて」、と云ひさして早や涙を先きだてたり。

臆病、「あはれ良き隣り人よ、そは思ひも掛けざることなり。先づ傷はしき子供たちの爲めを思ひても、斯かる相應はしからぬ事して、身を滅ぼすことは止められよ」。

基女、「否とよ、子供らとても一人として殘らんことを欲はず、皆な我身に連れ立つなり」。

臆病、「さて〳〵、何とて斯かる心ざまとは爲られしやらん」。

基女、「あゝ、隣り人よ、卿もし我身ほども知りたらんには、必らず諸共に連れ立たんことを望まるべきに」。

臆病、「さりとは亦如何やうなる新知識ぞや、かくも卿が心を友達より離らせ、また誰れも知るまじき方に卿を誘なひ行かんとするは」。

其時基督女信者の答へけるやう、「我身は夫に離れしより此のかた、別けても夫が彼の大河を越え了りしより以來、甚く心に苦しみを覺え、殊に曩きに夫の憂ひに在りしころ、之れを情なく待遇ひし事を思ひて、いとゞ後悔の念止ゞめ難く、今は唯だ夫の跡を慕ひて旅立つ外はあらじと思ひ居りしに、昨夜ゆくりなくも夢見るとて、我が夫の彼の國にて王の大前に棲み、食らふにも飲むにも王の傍らを離れず、また長しへに死ぬること無き者を友とし居るを見たり。其の住家の壯嚴美麗なる、世に優れたる玉の臺も之れに比らべては、宛ながら卑しき塵塚としも見えつべき程なるに、あはれ我身も共に彼

●哥林多後五ノ一—四、

處に在らばやと欲ひたり。然るに主は我れを容して其の饗應に招き給ふ由にて、今し方御使をもて此の招き書を賜はりたり」、と云ひつつ彼の手紙を取り出でゝ之れを讀み、更にまた言葉を添へて尋ねけるやう、「さて之れに就きて卿たちの思はくは如何にぞや」。

臆病、「卿の夫と云ひ、卿と云ひ、求めて斯かる危難を冒さんなど、さりとは物狂ほしさにも程こそあれ。卿の夫が門出早々より出で遇ひぬる難儀につきては、かの頑固どのや無定見の未だに噂さし合へることならずや。彼の人々も初めの程は暫し共に行きつるなれど、やがて賢こき人達に傲ひて其の行く末を慮んぱかり、早くも見切りを付けたるなり。且つ又、獅子の難、アポリオンの難、さては死の陰の難、その他さま〴〵の憂き目に會はれし事なども、數多度び繰り返へして聞くことならずや。別けても彼の浮華の市場にて遇はれし危難は、卿の能く〳〵思ひ知るべきことならずや。男にてさへ斯

計り手痛き目を見るべからんには、女の身として奈で堪へ得ることかあらん。さても〳〵、先づ此の可憐き幼な子たちを思ひやられよ、實に卿の肉と血なる此の幼子たちの爲めを思ひて、かしこくも家出は思ひ止どまられよ」。

基女、「あゝ、隣り人よ、何とて卿は我等を誘なはるゝぞや。我身は今手の中に一とつの値ひを握りて好き儲を得なんとす、かくて若し此の機會に從がひて勵むことを爲さゝらんには、それこそ我身の愚かさは如何ばかりなるべき。卿は我が道筋にて出會ふべき難儀の事など云はるめれど、そは元より我身の覺悟する處にて、その一とつだに我身に取りて力落しとはならぬなり。『樂は苦の種より芽ぐむ』、とかや、かくてぞ其の樂しみは彌や更に樂しからん。さては、卿は神の御名に依りて我家に來られたりとも覺えず、されば、卿の去りて再び我等を妨たげざらんやう願ふなり」。

臆病は之れを聞きて打ち腹立ち、其の同伴なる一人を顧りみて、「いかにや、慈悲どのよ、かゝる輩には談し甲斐もなく、交際甲斐もなし、さらば、いざ、振り棄てゝ歸へり行かなん」、と云ひ罵しる。されど慈悲は容易く之れに同意せんともせず、默然として佇立み居たり。さて、それには二つの理由あり、(一)、その心基督女信者が身の上を可憐しく思ひやりぬること、されば私かに考へけるやう、かくて此の友是非なく旅立ちすべしとならば、せめては幾程か見送り行きて、其の手助けともなりなんと。(二)、その心自己の魂しひを可憐しく思ひやりぬること、此は基督女信者の語るを聞きて稍や感動しけるなり、されば又私かに考へぬるやう、猶ほ暫らく基督女信者と語り合ひ、若し其の云ふ處に眞理あり又生命あらば、自からも心を定めて之れに從がはんと。かくて慈悲は其の同伴なる臆病に向ひ、「さて、隣り人よ、今朝しも卿と斯くは打ち連れて此家を訪づれたる

が、さるにても、目のあたり此の有樣を見るにつけ、我身は今暫らく基督女信者を見送り行きて、其の道中の手助けをも爲さばやと思ふなり」、と云ふ。されど其の餘の事は心に秘めて、更に告ぐることを爲さゞりけり。

臆病、「さては、卿も馬鹿の爲を仕て見んの心ありと見ゆ。轉ばぬ先きの杖とやら、賢こくも用心して、取り返へしの付かぬ怪我をせぬやう爲るこそ宜けれ」。

かく云ひ捨てゝ臆病は己が家路に歸へり行き、基督女信者は又其の旅路に出で立ちたり。さて臆病は其の家に歸へり、やがて、蝙蝠眼夫人、不遠慮夫人、輕薄夫人、また矇昧夫人など云へる隣人たちを呼び集へ、かの基督女信者が身の上や、其の思ひ立ちぬる旅路の事に就き、彼れ此れと物語りを始めてけり。

臆病、「隣りの方々よ、此の朝我身は暇に任せて基督女信者が許に到り、常の如く其の戸口にて音なひけるに、内より「もし神の御名に依りて來られなば入り給へ」、と云ふ。されど格別變りたることもあるまじと思ひて入り行きたるに、此はいかに、彼の婦人も其の子供たちも、皆な支度して此の里を立ち去らんとする處なりけり。さるからに我身は事の仔細を尋ねて、彼の婦人の簡單に云ふ處を聞きしが、さても如何にや、此の頃其の夫の跡を慕ひて旅立たんとする心がまへの由、玄かも亦夢の告げにより、彼の國の王なる君より招きの書を賜はり、其の夫の棲まへる處に呼び寄せらるゝと云ふことなり」。

其の時矇昧夫人は言葉を夾み、「さて〳〵、まこと出で行く積りなるにや」。

臆病、「元よりなり、如何なることありとも立ち去るべしと思はる。げにや我身は其の道中にて出で會はんとする種々の危難を語り、之

れにて其の家出を思ひ止まらせんと爲たりしが、其の事却つて彼の婦人には勵みとなりし程にて、『樂は苦の種より芽ぐむ、かくてこそ、其の樂しみは彌や更らに樂しからめ』、など憚りもなく云ひつることなり」。

次に蝙蝠眼夫人も言葉を夾み、「あはれ、愚かにも眼の見えぬ人なるかな。彼の夫の受けたる苦難を見てだに懲りもすべき者を、げにや彼の夫とても再び此の地に在らんには、最早や重ねて益もなき無駄骨折は爲すまじく、たゞ全く滿足して安らかに暮らすべきこと、我が眼に明きらかなり」。

不遠慮夫人も亦云へるやう、「疾く去れ、疾く去れ、斯かる氣違ひじみたる愚か者には用事も無し、去り呉るゝこそ我らの爲めなれ。斯かる人の此の里に住ひ居りて、玄かも斯かる思はくを有ち、鬱陶しきことのみ語りつゞけて交際もなり難く、また智慧ある者の聞くに堪へざる事のみ聞かされんには、我等の迷惑いか計りぞや。さるにても斯くばかり血迷ひたる虚氣者の多く有ればこそ、此の面白き世も住み憂きことなれ」。

其の尾に繼ぎて輕薄夫人も言葉を添へ、「いで〳〵、斯かる類ひの話しは休めなん、さても昨日は貴夫人淫亂が館にて、年若き少女たちのやうに遊び興じつることなるが、彼處に居合せぬるは誰れ〳〵、それに、肉慾夫人と我身と、其のほか三人り四人り計り、放淫夫人、猥褻夫人なんど、皆な打ち解けて舞ひつ歌ひつ、凡そ有らん限りの娯樂を盡したり。あゝ、放淫夫人の品好く優しきは然る事ながら、かの放淫男どのも實に愛嬌ある殿御ならずや」、と打ち語れり。

第一程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
あまつみそのゝ春をしぞ思ふ

さる程に、基督女信者は其の子供等を引き連れ、また慈悲をも伴なひて愈よ旅路に上りけるが、かくて行く〳〵談を始めたり。

基女、「さて慈悲どのよ、我身は暫しが程なりとも、かく卿の連れ立ち來られしを、身に餘る厚情なりと思ふぞかし。

其時年若き慈悲の云へるやう、「我身まことに卿の目論を知りて連れ立ち行くべくば、我身は再び我が里に歸へりたしとも欲ふまじきを」。

基女、「さらば、さて、慈悲どのよ、我身と共に運試めしを爲て見られずや。我身は此の旅路の終極を能く知るなり、そは我が夫先きに行きて、今は天下の有らゆる黄金にも代へ難き處に住みて在るなり。我らを招き給へる大君は慈悲を好ませ給ふ御方なるにより、卿とても我が案内にて行かれなば、必らず拒ばまるゝことは無かるべし。且つ又、卿さへ承知ならば、我身は賃金を拂ひて卿を手助けに雇ふべし、さりとて我が持てる物は我等隔てなく共同に用ゆべきに、兎も角も連れ立ち行かれよ」。

慈、「まことに固き望を與へられたらんには、其の道すぢの煩らはしさは然もあらばあれ、唯だ能ある御手に助けられて、些さかも躊躇ふことなく出で立つべけれど、さりとては我身も確かに受け入れらるべしと云ふこと、未だ定かに知り難きを何とせん」。

基女、「それも然ることなり。さらば慈悲どのよ、此くしては如何にぞや、兎も角も彼の片折戸まで連れ立ち行き、彼處にて卿の事を

尋ね見るべし。其の時もし思はしからぬやうならば、其の上は歸へり行かるゝとも卿の心まかせにすべく、また其れまでに卿より受けたる親切をも報酬ゆることゝせん」。

慈、「さらば彼處まで行きて見るべし、其の上は又其の成り行きに任かせなん。あゝ主よ、願はくは我身の上を憐れみて、天つ大君の聖旨に適ふことを得せしめ給へ」。

其時基督女信者は之れを見て、其の道連れを得つるを喜こび、且つは又、此の少女を說き勸めて其の身の救ひを慕はしむるに至りしを悅こびたり。かくて打ち連れて進みけるに、やがて慈悲は何思ひけん潸然と泣き出でたり。

基女、「のふ、我が姉妹よ、何とて卿は左のみ泣かるゝぞや」。

慈、「あはれ〳〵、かの罪惡ふかき里に殘れる我が親族やからの淺ましき有樣を思ひやりては、誰れか泣かじとて泣かざらん。わけても彼等に說き諭す者とてなく、また其の行末の事など語り聞かす人も無きを思へば、最ど憂ひに堪へやらず」。

基女、「あゝ旅は道連れ世は情とやら、卿が其の友人たちを憐れみ泣かるゝに付けて、我が夫基督信者の爲しつることも忍ばるゝなり。げに彼れも我身の情なきによりて嘆き悲しみしことなるが、さるにても主は悉く其の涙を集め置きたまひて、今しも我ら一同の上に及ぼし給へるなり。まことや『涙と共に播く者は、歡喜と共に刈りとらん』、また『その人は種を携さへ涙を流して出で行けど、禾束を携さへ喜こびて歸へり來らん』、ともあることなり。されば慈悲どのよ、卿の涙とても空に失はるゝことは無かるべし」。

其の時慈悲の歌へるやう、

めぐみ豐けく　憐れみ深き
主の御手づから　みちびきて

聖けき門に
聖けき峰に
聖けき羊欄に
さそへかし。

こゝろ殘して
別るゝ空の
ふるさと人も
憐れみて
君がなさけの
みつばさ廣く
救ひの蔭に
入れよかし。

さて愈よ進み行きて、彼の落膽の沼に着きけり。其の時基督女信者は之れを見て、「げにや之れこそ我が夫の落ち入りて、殆ふくも泥深く溺れんとせし處ならめ」、と云ひつゝ暫し立ち止まりぬ。抑も此の沼地は、大君の指圖に依り幾度か旅人の爲めに修繕を加はへつれども、玄かも其の甲斐なく却つて從前よりは猶ほ惡しくなりぬる處なり。されば明智翁も之れを指して、「あゝ主の勞役者たちの中にも、

その心眞實ならざる者多かるぞ憂たてき、彼等は王の街道を修繕すると唱へて、其の實は汚穢泥土を之れに投じ、却つて之れを破り害なふ」、と云へり。斯かる場所がらなりしかば、基督女信者は其の子供たちと共に唯だ茫然と立ち止まりて在りけるに、慈悲は之れを勵まし、「いざ渡らん、能く〳〵用心さへせば危ふきこともあるまじきを」、と云ふに連れて、皆々踏石に眼を配ばり、心細くも逶迤ひ渡らんと努めたり。

されど基督女信者は一度びならず二度びばかりも滑り落ちんとせし樣なり。さて皆々漸やくにして越え終はる時しも、誰れとは知らず、「主の言を信せし者は禍ひなり、そは主の語り給ひし如く必らず成るべければなり」、と云へる聲を聞きたる心地せり。

かくて進み行く程に、慈悲の云へるやう、「我身もし卿の如く、彼の門に到りて確かに喜こび迎へらるゝ望を持ちたらんには、我身は

犬とは新約を妨ぐる惡魔を指すなり、

此の落膽の苦を物の數とも思ふまじ」。

基女、「げにや、我身は我身の痛處を知り、卿は亦卿の痛處を知る。良き友よ、我らが旅路の終はらんまでは、なほ數多の憂き節に遇ふことなるべし。かの我らを惡むもの絶えず我らに逆らひ、我らが得んとする妙へなる光榮と幸福を羨やみ猜みては、有らゆる難儀と痛苦とを投げかけ、また恐怖と災害とをもて我らを惱まさんとすること、元より我らの覺悟すべき事ならん」。

それより幾程もなく人々は彼の片折戸に着きたりしが、其の時基督女信者は先づ進みて其の戸口に立ち、前に其の夫の爲しつるやうに、數多度び打ち叩きて音なひたり。されど答ふる者とては無く、却つて大きやかなる一匹の犬出で來りて吠えかゝるやう覺えけるにぞ、甚く恐怖を爲して暫しは叩くことも續けあへず、さても猶ほ打ち叩かんか、犬にや嚙まれん、さらば歸へり行かなんか、門守る者に見とがめられて、其の怒りにもや觸れなんと、取つ措いつ思ひ乱れて居たりしが、終にまた思ひ返へして再たび打ち叩き、之かも前よりは彌よ烈しく打ち叩きたり。其時門守る者聲を揚げて、「其處なるは誰れ人なりや」、と云ふ。それに連れて犬は吠ゆることを止め、やがて門は開かれたり。

さるほどに、基督女信者は恭しく一禮して、「主よ我らは主の侍女なるに、御門を打ち叩きたる無禮は許し給はれかし」、と云へば、門守る者之れに對ひて、「さて卿たちの望まるゝは何事ぞや、また卿たちは何方よりか來られつる」、と問ふ。

其時基督女信者の答ふるやう、「我らは曩に基督信者の來りぬる處より來れる者にて、其の用向もまた等しく、若し御意に叶はゝ、許されて此の門に入り、天つ御國の道に打ち立つべき御惠を受けん爲めなり。さても亦、我が主よ、妾は其の基督信者の妻なる者にて、

名をば基督女信者と呼ばるゝなり」。

之れを聞きて門守る者驚ろきを催ふし、「何とや、曩きに旅人の境涯を厭ひ惡みぬる者、今は早くも其の一人と成りぬるとや」、と云ふに、彼の婦人は頭を垂れ、「げにや、之かも亦、我が幼な兒たちも皆な連れ立てり」、と云へり。

其時門守る者此の婦人を手引きして内に入れ、また之れに對ひて云ふ、「あゝ『幼な兒を許して我れに來らせよ』ともあることなり」、と。斯くて其の門は閉ぢられたり。時に彼の人其の門の上なる喇叭手を招き、喜こびの譜を吹き奏でゝ基督女信者を持てなすべしと命じければ、やがて妙へなる響き洽ねく空中に鳴り渡れり。

さて慈悲は其の間始終門の外に在りて、若しや拒まるゝこともやあらんかと、恐れ戰のき又打ち泣きつゝ立ち居たりしが、基督女信者は先づ己れと子供たちの爲めに許容を得、さて次に慈悲の爲めに取りなしを爲始めたり。

基女、「我が主よ、妾には猶ほ一人の道連れありて外の方に立てり、之れも妾と同じ用向にて來りぬる者なれど、其の心は甚く屈托れたり、そは妾は大君の御招きに與かれども、彼の方は自分には此の事なしと思ひ案せらるゝなり」。

かく取りなし仕て在りける時しも、慈悲は最ど堪へ難うなりまさりて、はては自から進みて門を叩き、之かも嚴しく之れを打ち叩きて基督女信者を驚ろかせたり。斯かれば門守る者ふり返へりて、「此は亦誰れ人ならん」、と云ふに、基督女信者は、「之れこそ我が連れの者なれ」、と答へてけり。

さる程に、門守る者其の門を開きて打ち眺めしが、憐れや慈悲は氣を失なひて門の外に倒ふれ居たり。げにや其の門の開かれまじきを思ひ殆ぶむ餘り、終に其の氣を失なひけるなり。

(ヨ)約翰書二ノ七、

其時門守る者之れを助けて、『女よ、起きよ』と云ふ。慈悲は聲を揚げて、「あゝ、君よ、妾は今は力盡きたり、身に殘れる命ありとしも思ほえず」、と云へば、彼の人之れを勵まし、「恐るゝ事はあらじ、唯だ起き直りて、卿の來られし仔細を語られよ。げにや『わが靈魂裏に弱りし時、我れエホバを思へり、去かして我が祈なんぢに至り、なんぢの聖殿に及べり』、とも云はれたることなり」、と答へたり。

慈、「妾は身の推參なるを思ひて恐るゝなり、さるにても我が友基督女信者は大君の御招きに與かり居れど、妾は唯だ此の友に誘はれぬるのみ、絶えて御招きとては受けざるなり」。

門守、「彼の婦人は卿の此處に連れ立たんことを望みけるにや」。

慈、「さなり、さればこそ主の見らるゝ如く、妾も此處に來つるなれ。あゝ、願はくは罪の赦免と恩惠とを分ちて、此の憂たてき侍女にも與へ給へかし」。

(ヨ)雅歌一ノ十三、

(ヨ)雅歌一ノ二、

其時彼の人再たび之れを助けて門の内に導びき入れ、さて、「我れに來る者の其の手だては如何やうにもあれ、我れは總て我れに倚り頼む者の爲めに祈るなり」、と云ひつゝ傍へに立てる者どもを顧りみ、「行きて慈悲の爲めに嗅ぎ藥を取り來り、其の氣力の回復するやう爲よかし」、と云ふ。かくて人々沒藥の袋を取り來りて與へけるに、幾程もあらで元の如くに力づきたり。

されば基督女信者も其の子供たちも、また慈悲も今や旅路の始めに當りて、斯くも主に迎へられ、また親切なる其の御言葉に與かりしことなり。其時此の人々なほも進みて之れに向ひ、「我らは犯せし罪ゆゑに歎き悲しむ者なれば、願はくは主の御許を與へ、また此の上爲すべき事どもをも教へ給へかし」、と云へば、彼の人頷づきて、「我れ語と行爲とに依りて赦を與ふ、語とは罪の赦の約束なり、行爲とは我が夫れを得つる仕方なり。先づ接吻もて我が口唇より前な

約翰二十ノ二十、

る者を取れ、さらば後なる者おのづから示さるべし」、と云へり。

さて我れ夢の中に見けるに、彼の人尚ほ數多の善き語を告げて最と〻彼の婦人たちを喜こばせたり、また門の頂上に導びき行き、遙かに基督の十字架に懸り給へる有様を示して、其の救はれしは全く主に依ることなどを語りたり。

次に唯或る園亭に至り、彼の人の暫し立ち去りけるひまに、人々互ひに語らひ合へるやう、

基女、「あゝ此處に入ることを得たる我が喜びは如何ばかりぞや」。

慈、「卿は元より然る事ながら、我身こそは實に飛び立つ程の喜こびを覺ゆるなれ」。

基女、「我身は初め門邊に立ちて打ち叩きけるとき、誰とて答ふる者も無く、別けても彼のむくつけき犬の最と凄まじく吠えかゝりぬるを見て、さては頼みしことも空なりしかと思ひたり」。

ルカ十四ノ四十一、

慈、「我身はまた一入の恐怖を覺えたり、卿が懇ごろに迎へ入れられて、我身獨り外に取り殘されしとき、我が心持は如何やうなりしぞや、これこそ、『二人の婦磨ひき居らんに、一人は取られ一人は遺さるべし』、と云へるものなるべしと思ひて、さては爲ん方盡きたるかと、叫ぶまじとすれど禁めもあへで、徒づらに悶え惱み、また打ち叩くことも得せざりしが、さるにても門の上に書かれたる語をつく〴〵と打ち眺めて、漸やくに氣を取り直ほしたり。且つ又、思ひけるやうは、とても生きんことを欲はゞ再たび叩くことを爲すべく、さもなくば死ぬるの外はあるまじと、されば我身は重ねて打ち叩くことをなし、玄かも今は我が魂しひ一期の浮沈に迫りぬるにより、げに一生懸命となりて打ち叩きたり」。

基女、「まことや卿の叩くことの切なりしには我身も甚く動かされたり、我身生れて斯くも熱心に打ち叩く者を見しことなし、されば、

●馬太十一ノ十二

彼の『人々屬みて天國を取らんとす、屬みたる者は之れを取れり』、とあるをも思ひ合はせたる程なり」。

慈、「あはれ、我身と同じ身の上ならん人は、いかで斯く爲さゞれと云はんも、かく爲さでやはありぬべき、門は情なくも閉ぢられ、猛き犬は吠ゆ、げに我身の如く心弱からん者は、誰れとてか命がけとなりて門を叩くことを爲さゞらん。そは兎も角、主は我身の無作法なるを怒られけるにや、何卒卿の聞かれつることを語られよ」。

基女、「されば、卿の打ち叩く音を聞きける時、彼の人は左も邪氣なき微笑を含みたり、思ふに卿の爲せしこと其の意に適へるならん。さるにても我身は彼の人の何として斯かる犬を持てるにやと、私かに訝かしくも思ふなり、最初より斯かる者ありと知りたらんには、我身とても夫れ相應の心構へは爲しつらんを、去かし今は早や此の門に入ることを得てしかば、別に云ふべきこともなく、唯だ喜こぶ計りなり」。

慈、「次に彼の人の來られんとき、我身は斯かるむくつけき犬の何とて此の國に養なはるゝやらんを尋ね見るべし。よもや其の機嫌に觸るゝこともあるまじきに」。

其時子供たちは之れを聞きて、「何卒左樣なし給はれ、また彼の犬を、殺すやう賴みて給はれ、我ら此處を去りなん時、嚙まれやせんかと恐るゝに」、と云へり。

●耶利米記十二ノ一

さる程に、彼の人再び歸へり來りしかば、慈悲は其の前に平伏し、且つ拜して云へるやう、「主よ願はくは我が感謝と讚美の献げ物を受けさせ給へ」。

彼の人之れを見て、「起てよ、平安汝に在れかし」、と云ふ。されど慈悲は猶ほ平伏して、「あゝ『エホバよ我が汝と爭そふ時に汝は義し、たゞ我れ鞫のことに就きて汝と言はん』、さるにても斯かる猛き犬を

此の庭に養なはるゝは何故ぞや、我らの如き婦子供たちは之れを見て打ち恐れ、さながら御門より逃げなんとする計りなるに」、と云へり。

彼の人また之れに答へて云ふやう、「彼の犬には他の所有者ありて、其の庭に閉ぢ込められ、旅人たちは唯だ其の吠ゆる聲を聞くに過ぎず、此は程近き堡砦の主に飼はるゝ者なるが、時には此の門の近くまで出で來り、其の太く吠ゆる聲に依りて正直なる旅人を驚ろかし、却つて惡しき方より善き方へ追ひやりたること屢々なり。げにや其の所有者は我れに惡意をさし挾み、我が許に旅人たちの來るを妨たげんとて、彼の犬を養なひ置くことなり。また時には彼の犬其の鎖を放れ來りて、我が愛する者たちを惱めしことも少なからず、されど我れ今の程は全く之れを忍びてあるなり、且つまた、旅人たちには然るべき助けを與へて、猛惡なる彼の者の手より救ふことなり。

さても如何にや、卿とても元來斯くとだに知りたらんには、彼の犬を恐るゝことも爲ざらましを、かの門々に立ちて物を乞ふ者を見るに、其の施こしを受けん爲めには、犬に吠えられ又嚙まるゝ事をも厭はぬことなり。されば一匹の犬、玄かも他人の庭に在りて、其の吠ゆることは却つて旅人の益となるてふ犬、あゝ、誰かはまた斯かる犬の爲めに妨たげられん、「われ我が愛する者を獅子の口より救ひ、其の生命を犬の猛き勢ひより脫かれしむ」、ともあるならずや」。

其時慈悲の云へるやう、「妾は自からの無智なりしを思ひ知るなり。げにや主は萬事を宜しきに適ひて爲し給ふことを悟りたり」。

折しも基督女信者は其の旅路の事を語り出で、また道筋のことなど尋ね始めしかば、彼の人憂きに其の夫に爲しつるやうに、先づ食物を與へ、また其の足を洗ひなどして、やがて其の夫の足跡ある道筋に打ち立たせたり。

第二程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
あまつみそのゝ春をしぞ思ふ。

さて我れ夢の中に見けるに、彼の人々は天晴れやかなるに任せて、愈よ其の道筋を進みたり。折しも基督女信者の歌ひ出でけるやう、

「にがき涙は　よろこびに
くらきおそれは　あけぼのに
やがてぞ共に　變はりなん、
幾世つきせぬ　みめぐみの
生命の國を　望みつゝ
出で立つ今日の　うれしさよ」。

さて此の道筋に沿へる石垣の彼方には、疑きに云へる彼の犬の所有主が所有せる庭園あり、また庭園の菓樹の最と能く實のりたるが、垣を越えて此方に枝垂るゝもありたり、其の熟したる狀の心地よげなるに、旅人の我れを忘れては之れを摘み、且つ食しては身を害なふも多かりけり。斯かりしかば基督女信者の子供たちも、元より幼な童の習ひとて、たちまち其の木の實に心引かれ、枝を撓わめて食し始めたり。其の母は之れを見て、「そは宜ろしからず、其の木の實は一とつだも我らの有にあらざれば」、と云ひ懲らしつれど、子供たちは尙ほ止めんともせず、元より其の敵のものなりとは知る由なく、若し之れを知りたりせば、其の母は如何ばかりか驚ろき恐れしことならん。兎角して其の處を通り過ぎ又も行手を急ぎけるに、やがて三丁あまりも行きけると覺しき頃、此方を指して足早やに向ひ來る兩個の最と醜つけき者に出で會ひたり。されば基督女信者と慈悲と

は直ちに面被もて顔をかくし、其の子供たちを先き立てゝ、早くも此處を通り過ぎんと爲たりしが、彼のものどもは矢場に寄り添ひて殆ふくも兩女を抱き留めなんとす。さるからに基督女信者は聲を勵まし、「こは理不盡なり、其處退きてよ」、と叫びつれど、彼の者どもは宛ながら耳聾ひたらん者の如く、其の言葉をも聞かばこそ、愈よ手ごめにせんとするにぞ、基督女信者は打ち腹立ち忽ち足を擧げて之れを蹴る、慈悲もまた有らん限りの力を盡して防ぎたり。其時基督女信者また打ち呼ばゝりて、「其處退きてよ、其處退きてよ、我らは友人たちの情を賴りとする旅の者にて、卿たちに取らすべき金錢とては持たざるに」、と云へば、一人の男之れに答ふるやう、「我らは金錢の爲めに卿たちを騷がす者にあらず、唯だ些さか申し入れたき事ありて來りつるが、卿たち若し其の願ひを承知せられんには、我ら末長く卿たちを愛し敬まふべし」。

基督女信者は之れを聞きて其の意味を推量し、さて再たび云へるやう、「否とよ、我らは行手を急ぐ旅人にて留まることは爲し難し、我らには生死に關はる一大事あれば、卿たちの云ふところを聞きて之れに從はんこと思ひも寄らず」。かく云ひ捨てゝ愈よ通り過ぎなんと爭そひぬれど、彼の者どもは尙ほしも道を遮へぎりて、「我らは卿たちの命を害なはんとする者にもあらず、我らの願ふは外の事なり」、と云ふ。

「されば、卿たちの求むる處は我らの身も靈をも得んとするものなること明らかに察せらる。されど我らは斯かる誘なひの爲めに將來の幸福を妨げられんよりは、寧そ此の場にて潔よく死ぬべし」、かく云ひ了りて基督女信者は更に聲を揚げ、「人殺し、人殺し」、と打ち叫びたり。是れ婦人の身を保護する古しへの律法に從がひたる處置なり。されど彼の者共は愈よ其の意を逞ましうして强ひて迫りける

❼甲命記二十二ノ二十五、二十七、

により、婦人たちも益〻叫ぶことを續け居たり。

さても、彼の門より此處までは程遠くもあらざりければ、其の叫び聲彼方に聞えけるに、家の内の人々此は基督女信者の聲なりと聞き知りて、急ぎ救ひの爲めに馳せ來れり。見れば婦人たちは今しも危ふき爭鬪の最中に在りて、子供たちは其の傍らに立ちて打ち泣き居るに、彼の人々急ぎ馳せ入りて、「此は何事なるぞ、汝らは吾が主の民を犯さんとするか」、と打ち呼ばゝり、直ちに彼の者どもを捕らへんとせたりしが、兩人の惡漢は逸早くも石垣を乘り越えて彼の庭園に遁れ入り、吠ゆる犬を力に隱れ失せたり。其時救助をなせし人婦人たちに對ひて、別に怪我とても無かりしやと問ふ、されば兩女は之れに答へて、「有り難き御助けを蒙むりて幸ひに事もあらず、唯だ些さか驚ろかされたる計りにて、別に怪我をも受けざりしは、げに主の御蔭に依ることなり」、と挨拶してけり。

かくて稍ありて彼の救助を爲せし人言葉を續けて云へるやう、「さるにても卿たち曩きに彼の門にて手厚き待遇を受けぬる時、自からの纖弱き程を知りて、一人の嚮導者を乞はれんには、主は必らず卿たちに之れを授け給ひしなるべく、斯くては此の樣の危ふき難儀にも罹らざらましを、其を爲さゞりしこそ實に訝かしき沙汰の限りなれ」。

基女、「あはれ、まことや妾たち目のあたりの祝福に心取られて、來らんとする危難のことなどは打ち忘れつるなり。且つは又、かくも大君の御屋敷近く、斯かる惡たれ者の潛み居るべしとは誰れかは思はん。げに妾たちが之れを願ひ求めざりしも然ることながら、主は其の事の我らを益すべき由を知ろしめしつゝも、去かも之れを我らに附け添へ給はざりしこそ、中々不思議とも云ふべけれ」。

救助者、「求められざるに物を與ふるは、必らずしも要なきことな

り。かくしては其の事の價値を落す虞れあり。されど或る物の必要を感じ、求めて之れを得たらんには、其の價値は之れを得る者の目に明らかにて、從がつて其の後の用にも足ることなり。吾が主若し曩きに卿等の嚮導者を授けられたりせば、今しも卿たちが悔やみ歎くには引きかへて、其の事を願ひ求めざりし手ぬかりをだに、なほ手ぬかりなりきと思ひつくことも無かりしならん。されば凡ての事善きに働らきて、卿たちを彌よ謹慎ふかくならしめんと爲ることなり」。

基女、「さりとては妾たち再たび我が主の御許に歸り行き、身の愚かさを懺悔して、別に嚮導者を乞ひ求むべきにや」。

救助者、「卿たちの懺悔は我れ之れを取りなしすべし。卿等再たび歸へり行くにも及ぶまじ、そは卿たちの行く處すべて處として乏しきこと無かるべく、また我が主が其の旅人を受け入れん爲め備へ置かれたる就れの宿りにても、有らゆる支度整のひて之れを安全に守護ることなり。されど我が云へる如く、人もし自から爲られんと思はゝ、主に求むべき筈なり。元より求むる値ひも無からん者は數ふるに足らぬ物なるべし」。

かく云ひ了りて彼の人は元と來し方へ歸へり行き、旅人たちは又其の道を續けたり。

其時慈悲の云ひ出でけるやう、「さて何とやらん力の拔けたる如き心地す、されど此の後は恐ろしき危難もあるまじく、また憂ふべき節もあらじと思はる」。

基女、「あゝ我が姉妹の邪氣なさよ、知らぬ程こそ崇りも無からめ、我身は豫てより斯かる危難のあるべき由を知り乍らも、なほ其の備へを怠たりたり、されば我身の過失は最と〳〵深かり」。

慈、「卿が豫てより其の事を知り居られたりとは最と不思議なり、

何卒其の仔細を聞かされよ」。

基女、「さればなり、我身猶ほ家に在りける頃、或る夜さり一とつの夢を見たりしが、其の時世にも在るまじき狀態したる者兩個我が枕べに立ち、我身の救を妨たげんが爲め、何事をか謀らみ居るやう覺えたり。彼の者どもの云ひけるやうは、『さて此の女人をば如何にかせん、醒めても、眠りても、主の御救ひを乞ひ叫ぶならずや、此くて其の儘に爲し置かんには、先きに其の夫を取り逃しつるやうに、また此の女人をも失なひなん』、と。此の一事に依りてだに充分用心して身の備へをば爲すべかりしなり」。

慈、「さるにても、斯かる怠惰に依りてこそ、なか〳〵自からの足らざる由をも知り、さては又、主の恩惠の彌や深きをも知ることなれ。げにや主は我らの求めに餘る親切を施こし、我らを强き敵の手より快よくも救ひ給へるなり」。

かく語り續けて行く程に、やがて道沿ひなる一とつの家に近づきたり、(是れ前編に委しく云へる釋義者の家なり)。さて愈よ近づきて其の戸口に到りけるに、何やらん頻りに語り興ずる聲家の內より漏れ聞こゆ。人々訝かりて耳聳たつれば、こは如何に基督女信者の名さへ語り囃され居るなりけり。まことや基督信者の妻にて曩きに旅立ちを厭ひぬる者、今や其の子供たちをさへ將て都に上るてふ噂さ廣まりけるにより、此の所にても皆な興あることに思ひしことなるべく、玄かも目のあたり其の人々が此の門邊に在りぞとは知る由もあらで、かくは語らひ居ると覺えたり。終に基督女信者は其の戸口に寄り、前に片折戸にて爲しつるやうに、ほと〳〵と打ち叩きて音なひたり。其の時一人の少女出で來り、兩個の婦人を玄げ〳〵と打ち見やりて、さて云ひけるやう、「卿たちの尋ねらるゝは誰れ人ぞや」。

基女、「妾たちは旅の者なるが、日も早や暮れなんとして行手の程

も覺束なきに、さるにても此處は旅人の爲め、殊更に備へられたる處なりと聞きて、其の御蔭に與からんとて參りたり」。

少女、「さらば卿の名を聞かされよ、妾行きて我が主に告げまゐらすべきに」。

基女、「妾は名を基督女信者と呼ばれ、先きつ歳此の道を通り行きける旅人の妻なる者、此れなるは其の四人の忘れ形見なり、また此の處女は妾の道伴にて共に都に志ざゝるゝなり」。

之れを聞きて少女無邪氣（是れ其の名なり）は家の内に走り入り、急ぎ人々に打ち向ひて、「さても門邊を音なふ者を誰れなりと思はるゝぞや。此れこそは彼の基督女信者にて、其の子供たち並びに其の伴もろとも此處に宿りを求むるなれ」、と云へば、人々は忽ち躍りあがりて打ち喜こび、やがて行きて其の由を主人に告げたり。

さる程に主人は親しく其の戸口に出で來り、靜かに打ち見やりて、

さて云ひけるやう、「さては彼の善良なる基督信者が、旅の門出に就きぬるとき、後に殘しつる基督女信者とは卿の事にてありけるか」。

基女、「まことに云はるゝ通りにて、此れなるは其の四人の忘れ形見にてあるなり。妾曩きには心頑くなにて夫の憂き節をも思ひやらず、情なくも獨り淋しき旅路に立たせつる事なれど、今は此の道より外に義しき者もあらずと思ひ悟りて、妾も此處には來れるなり」。

釋義者、「かくてこそ、或る人の其の子供に對ひて、『子よ、今日わが、葡萄園に往きて働らけ、答へて否と云ひしが、後ち悔いて往きたり』、とあることも思ひ合はされる』。

其の時基督女信者の祈りけるやう、「神よ願はくは其の如く我身を赦し給へかし、かくて、汚なく疵なき者となりて聖前に出づることを得させ給へ、アーメン」。

釋義者、「兎も角も其處は端近なるに、いざ此方へ入り來られよ、

あゝ、アブラハムの娘なれや、今も今とて卿たちの事につきて噂さし合へる處なるに、いざ、いざ、子供たちも、處女子も、いざ此方へ入り來られよ」。

かく云ひて人々を家の内に請じ入れたり。

さて皆々内に入り、席定まりて休らひ居ける程に、此の家にて旅人の待遇を受け持つ人達も出で來りて、基督女信者の旅人となりぬるを祝し、此れも笑み、彼れも笑み、かくて孰れも皆な打ち笑みて喜こびたり。彼の人達は又子供らをあひしらひて優しくも其の頰を撫でさすり、また慈悲をも等しく持てなして殘る方なき親切を盡し、皆々能くこそ來られつれと眞心より挨拶してけり。

暫らくありて、猶ほ晩餐には些さかの間もありければ、釋義者は旅人たちを悟道の間と云へるに連れ行き、曩きに基督信者が見たりける事どもを示したり。されば彼の檻の中なる絶望の人や、恐ろしき夢見をなしつる人や、數多の敵を切り拔けつる人や、さては其の人々の中にて最とも偉き人の肖像など、すべて其の頃基督信者の益ともなりし有らゆる事どもを示されたり。

かくて、基督女信者や其の伴侶の稍や此等の事を會得しぬるを見て、釋義者は次に一とつの部屋に伴なひ行きしが、此處には其の手に芥掻き熊手を持ちたる人あり、此の人は下の方のみ見て其の他は見ること叶はず、唯だ目前なる床の塵や木片や藁屑などを其の身のまはりに掻き集めて、絶えて上の方を見んともせず、之かも其の頭の上には、其の手に天上の冕を持ち、且つ其の熊手を捨てゝ此の冕を取らんことを勸むる一個の人立ち居たり。

基督女信者は之れを見て、「此の意味は我身にも些さか分りぬる心地す、さるにても、君よ、此は浮世の人に擬へたるものならずや」、と云ふ。

釋義、「まことに其の通りなり、また彼の熊手は人の肉慾を表はすものにこそ。抑も彼の男が木片や藁屑等をのみ掻き寄せることに心取られて、絶えて天上の冕を得んとも思はざるは、是れ或る人々に取りては天の事は夢物がたりの如く、唯だ此の世の事のみ有り難く見ゆることを表はすなり。さて又彼の男が唯だ下の方のみ見て其の他を見ること叶はざるは、是れ浮世の事一と度び入りて人の心を抑ふる時、其の思ひ全く神より遠ざかるに至ることを表はすなり」。

基女、「あゝ此の熊手より救ひ出ださるゝ由もがな」。

釋義、「げにや、かの『我れをして富ましめざれ』、と祈らん者、今は萬人に一人だも覺束なく、却つて多くは塵芥、藁屑、木片などをこそ最と物々しげに慕ひ求むる次第なれ」。

基督女信者と慈悲とは之れを聞きて、「あはれや實に其の通りなるぞ憂たてし」、と云ひて潛然と打ち泣きたり。

次に釋義者は人々を伴なひて、此の家の中にて最とも良き部屋に入り行きたり、此は最と麗はしく四邊目ばゆき部屋なりしが、彼の人皆々に對ひて、此の部屋中を見渡し何にても其の意に留まる者あらば云ひ出でよと命じけるにぞ、互ひに彼方此方と見渡しけれども、別に之れぞと思ふ者もなく、唯だ壁の上に最と大きやかなる、一匹の蜘蛛のみ見られつれど、誰れとて之れに意を留むる者はあらざりけり。

其時慈悲は先づ口を開きて、「君よ、我身には何も見えぬなり」、と云ふ、されど基督女信者は默し居たり。

釋義者は更に言葉を繼ぎ、「さるにても今一度見直して見られよ」、と云ふに、基督女信者はつくづくと見渡し了りて、「されば、むくつけき一匹の蜘蛛の、其の手もて壁に懸れる外は、絶えて見るべき者もあらず」、と云ふ。其の時彼の人之れに應じて、「さても此の廣き部

屋中に蜘蛛は唯だ一匹のみなりやと」、押し問へば、元來感じ早き基督女信者忽ち何事をか悟りたりと覺しく、早や涙ぐみて答へぬるやう、「まことや、主よ、此處には一匹のみならず數多くあり、玄かも其の毒は彼の蜘蛛の毒にまさりて害多き者にぞある」、之れを聞きて釋義者は左も滿足げに打ち頷づき、「まことに其の通りなり」と云ふ。そのとき慈悲は略ぼ其の謎の意を悟りて顏打ち赤らめ、また子供たちも等しく其の顏を掩ひたり。

時に釋義者また言葉を繼ぎて云へるやう、「見らるゝ如く、『蜘蛛は手をもて捕かまり王の家に居る』なり。其の意は、卿たち如何ばかり罪惡の毒に充ちてあるとも、たゞ信仰の手に依り縋りなば、天なる王の宮殿にて其の最と善き部屋にだも住み得らるゝことを表はすなり」。

基女、「いづれ左るべきことならんとは思ひたり、されど妾は悉く推量し得たるにあらず。かの蜘蛛が其の毒ある身にて、玄かも其の見すぼらしき態にて、尙ほ此の善き部屋の中に手をもて捕かまり居ることにより、之れを見て信仰の事を學ぶべしとは、妾の思ひ付かざりしことなり。たゞ妾は如何ほど麗はしき部屋に居るとても、我らの姿醜くして彼の蜘蛛の如く見ゆめることを思ひつるなり。また之れに依りて神が何物をも徒らに造りたまはざることを悟るなり」。

其時人々は皆な打ち喜こびて見えしが、猶ほしも涙ぐみて互ひに顏を見合はせ、また釋義者に向ひて頭を垂れたり。

釋義者は次に一羽の牝鷄と數羽の雛鳥の養はれ居る處に人々を伴なひ行き、暫し其の爲す狀を見てあれかしと云ひ含めたり。やがて一羽の雛其の群を離れて水槽のほとりに來り、水を飲みけるが、一口ごとに首さしのべて天を仰ぎたり。「いかにや、此の黃雛の爲る態を見て、卿たちも恩惠を受くる度ごとに、仰ぎ見て其の來るとこ

ろを思ふべきならずや。そは兎も角も」、と云ひさして、釋義者は更に言葉を繼ぎ、「なほ其の爲る狀を篤くと見てあられよ」、と云ふ。されば人々意を留めて見てあるほどに、かの母鷄の其の雛を守り育つるに四つの仕方あるを見出したり、(一)、日ねもす別け隔てなく凡ての雛を招き呼ぶこと、(二)、時々は其の中の一とつ二たつを特さらに招き呼ぶこと、(三)、優しき聲して其の雛を懷つくること、(四)、時には消たゝましき叫び聲を出すことなどなり。

マタイ二十三ノ三十七、

釋義、「さて今此の母鷄と雛とをもて、卿たちの大君及び之れに從ふものどもに比ぶべし。まことや大君の親しく其の民を守り育て給ふ狀、此の母鷄に左もよく似たり。其の招きの一樣なる時は何も格別に與へらるゝことなし、其の招きの特別なる時必らず何物をか與へらる、其の翼のもとに集めらるゝ時優しき聲を掛け給ふ、而もまた敵の近づくを見ば烈しき叫び聲して之れを警しめ給ふなり。げにや、愛する人々よ、我れは卿たちが婦人なるにより、必らず思ひ當ることも多かるべくと、別けても此處に伴なひ來れるなり」。

基督女信者は一禮して、「君よ、猶ほ多くの事どもをも示し給はれかし」、と云ふ。されば次に屠所に伴なひ行きしが、此處には一人の屠手ありて一匹の羊を殺さんとする處なりけり、見よ、やがて彼の羊は最と靜に從容として死に就きたり。そのとき釋義者の云へるやう、「あはれ大君は卿たちの事を其の羊なりと云はるゝなり。されば此の羊に依りて忍ぶことを學び、また呟やくことなく、歎つことなく、凡ての害惡を宥恕すべきことをも學ぶべし、見られよ、皮むかるゝだにも忍びてあらがはず、かくて從容として死にて行く羊のさまや」。

次に釋義者は庭園に下り行きて、數多の花を旅人に示し、さて云へるやう、「見られよ、花の色々、其の姿、其の香、其の匂ひ、其の

趣むき、百種千種に異なりて、いづれ勝り劣りも有ることなり。また花守の植ゑ置きたる處々に立ち並びて、互ひに爭そふと云ふことなし」。

次にまた釋義者は人々を其の畑に伴なひ行きしが、此處には小麥大麥など植ゑ付けあり、されど能く見れば其の穗さきことゝく摘み取られて、殘るは唯だ麥がらのみなりけり。さて釋義者は之れを指して、「あゝ此の土地とても手を盡して土かひ畊やし、また種まきしたる者なるに、かくては何の獲る處かあらん、また如何にか始末すべき」、と云へば、基督女信者も打ち頷づき、「まことや、殘れる物を取りて肥料を作るか、また燒き棄つるの外は無からん」、と云ふ。そのとき釋義者言葉を更め云へるやう、「その事なり、我らの求むる處は其の實なり、之れ無くば唯だ燒かるゝか、人に踏まるゝかの外はあらじ、いかにや、卿たちも之れに依りて自から省みるところ無からずや」。

さて夫れより家の方に歸り行くとき、一羽の少さき駒鳥の、その口に一とつの太やかなる蜘蛛を喰はへ居るを見出でたり。時に釋義者は人々にむかひ、「さて此の意を何とか見る」、と尋ねたり。されば人々はつく〳〵と之れを打ち眺めしが、慈悲は唯だ訝かるのみ、やがて又基督女信者の云ひ出でけるやう、「あはれ駒鳥の如き優しき鳥の、斯かる餌を啄ばむこそ、げに見下げ果てたることならずや。駒鳥とし云へば人にも馴れ、また他の小鳥にも勝りて愛らしく、その餌としてはパンの屑か、或ひは其の類ひの害なき物とのみ思ひ居りしに、かくては何とやらん厭とはしき心地こそせらるれ」。

其時釋義者の答へけるやう、「此の駒鳥こそは或る信者に擬らへらるべき模型なれ。彼等は唯だ見たる處にては此の鳥に似て其の聲可愛らしく、其の色合も、其のなりふりも亦麗はし。彼等は眞實なる

信者たちを此上なく愛するげに見ゆ、而も他の者に勝りて斯かる人たちと交らひ友たることを乞ひ願ひ、さながら善き人のパンの屑を得て其の身を養なふらしく見ゆ。さればこそ假面をかぶりて善き人の家に出入りすることをし、また主の席をも汚すことを爲るなり。されど私かなる處にては、また此の駒鳥のごとく、蜘蛛なんどを捕へて之れを呑み、――乃はち忽ち食物を變へて邪淫を飲み、また罪惡を飲み下すこと宛ながら水を飲む如くするなり」。

かくて再たび家の内に入り行きしに、晩餐の支度なほ未だ整のはざりしかば、基督女信者は釋義者に乞ひて、更に有益なる事ども、もを語り、また示されたしと求めてけり。

其時釋義者は數多の格言とも覺しき者を說き出でたり。

「豚その肥えたること多き者は、好んで泥に落つること多く、牡牛其の肥えたること多き者は、輕躁にして屠所に進むこと多し、人また慾情に健かなること多き者は、また罪惡に急ぎ下ること多き者なり。

麗はしく且つ美くしからんことを願ふは婦人の習ひなり、去かも神の目に價高く見ゆる物をもて身を飾ることこそ、最と奥ゆかしきことなれ。

一夜二た夜を眠らで守り明かさんは難き業にもあらず、されど誰れか能く一と歲の長きに堪へ得んや。かの信者となる者、その始むる事や容易くして、終りに至るまで堪ふることの難き概むね此の如し。

船の暴風に會ひたる時、價少なき荷物より棄て始むるは常のことなり、誰れか先づ其の最も良き物を棄つる人あらんや。かも神を恐れざる人は此の理を知らず。

一ケ所の漏り能く一艘の舟を沈め、一個の罪惡能く一人の靈魂を

滅ぼす。

其の友を忘るゝ者は恩を忘るゝなり、されど其の救主を忘るゝ者は、我れと我が身に無慈悲なる者なり。

罪惡の中に生活して尙ほ未來の幸福を望む者は、かの醜草を蒔きて小麥を獲んと思ふ人に宛も似たり。

人もし正しく世を送らんと思はゞ、常に自から其の最後の日を目のあたりに置きて身の警戒と爲すべきなり。

嘯やくことゝ、心の定まりなきことゝは、罪惡てふ者の世に在る證なり。

神の照らし給ふ此の世にして、既に此くばかり價値あるものならば、神の稱揚め給ふ彼の天國は如何にぞや。

よし憂きふし繁き此の世の生涯は厭ひ棄つべきものにもせよ、かの天上の夫れを思はゞ如何にぞや。

人間の善なることは然もあらばあれ、誰れか伴はりて神の善に擬する者あらんや。

人は時に食事に就くも、猶ほ且つ食して餘すことをなす、イエス、キリストの義と功績も此の如し、去かも全世界の者擧りて之れを受けて猶ほ餘りあるなり」。

釋義者は此く說き了りて、再もや人々を庭園に伴なひ、一とつの樹立を示したり、此は其の內部腐りて空虛となり居れど、なほ其の葉茂りて枯れも果てざる者なるに、慈悲は打ち見やりて、「此は如何なる仔細ならん」、と云へば、釋義者之れに答へて、「此の木は其の外部に云ひ分なくして、而も其の內部は腐れたり。是れ神の庭園內に在る多くのものに比べつべき者なり。彼等は口をもて神を讚むることをすれど、其の實は神の爲め何の役にも立たぬ者なり、其の葉は茂ければ、去かも其の心は云ふ甲斐なし、唯だ惡魔の火絨箱なる火

絨に似たりとも見るべからん」、と打ち語れり。

さる程に、晩餐の支度とゝのひて、膳部も凡て備はりければ人々定めの席に着き、感謝をなして食事を始めたり、また、此の家の習慣として食事の時音樂を奏して旅人を持てなすことなりければ、樂人たち出で來りて琴彈き鳴らし、また勝れて聲好き人ありて、節さやかにも歌ひてけり。

「エホバは我れを　養ふ者なれば
我れには乏しき　こともあらじな、
雨風荒らき　浮世の旅路
頼みまつるは　たゞ君のみぞ」。

さて音樂の調べ果てける時、釋義者は基督女信者に向ひ、初め如何なる事に心動きて、かく旅人の生涯を送ることゝはなりぬるやらんと尋ねたり。されば基督女信者の答へけるやう、「最初には我が夫を失なひつること心を痛むる種なりしが、そは唯だ人情の脱かれがたき次第にてありつるなり、次には夫の憂き艱難や旅の辛苦を思ひやり、また我身の愚かにも情無かりしことなどを思ひて胸を痛め、はては激しく罪を感じて、身も世も有られぬ程となりしが、折しも一つの夢によりて、我が夫の樂しく暮し居る趣むきを悟り、また其の住める國の大君より招きの書をも賜はりたり、げにこそ其の書と夢の爲めに心動かされて、竟に此の道に出で立ちたるなれ」。

釋義、「さるにても、卿が門出の前に誰れも妨ぐる者とては無かりしにや」。

基女、「さればなり、妾が隣人の一人にて臆病と云ふ者ありけり、此は曩きに彼の獅子を恐るゝとて、我が夫を誘なひ歸へらんとしつる人の親戚なるが、此度もまた我が身を嘲けりて、我が志ざしを無謀なる企てなりと罵しり、且つは我が夫の出あひぬる種々の憂き節

を數へ立てゝ、妾が心を挫かんとせり、されど之れには可なり打ち勝ちたる積りなり。さても亦今一つの夢は、痛くも我身を惱ませたり。そは兩個のむくつけき者我が枕邊に立ちて、妾が道行をあやまらせんと謀らみ居るやう覺えつることなり。げにや其の事未だに胸に浮びて、道すがら遇ふ人ごとに恐れ惑ひ、若しや我身に害を爲す者ならんかと安き心地もなき程なり。また誰れにも語るまじけれど我が主に告げまゐらすべき事あり、妾たち彼の門より此處に來るとて、端なくも辛らき目に遇ひ、竟には人殺しとまで叫びつることありしが、其のとき我らを惱ましぬる兩人の者こそ、正しく彼の夢にて見つる者どもなりしやう覺えしことなり」。

釋義者は之れを聞きて、「其の始めや善し、其の終りは彌や增しに宜しからん」、と云ひつゝ更に慈悲に向ひて尋ねけるやう、「さて、ゆかしの者よ、卿が此處に來りぬる仔細は如何にぞや」。

慈悲は差しうつむきて顏打ち赤らめ、暫し無言にて身ぶるひ居たり。

されば釋義者は重ねて勵まし云へるやう、「恐るゝことはあらじ、たゞ信じて卿の思ふがまゝを語られよ」。

かくて慈悲の語り出でけるやう、「げにや、君よ、妾は經驗に乏しく、また覺束なき行末のことを思ひ恐るゝに付けて、わざとながら默したり。妾は基督女信者どのゝ如く、夢や幻ろしの事を語ることも叶はず、また親しめる者の諫を拒みて愛ひ悲しむてふ事も心得ざる者にこそ」。

釋義「なつかしの者よ、さりとては、如何なる事に心動きて斯く爲ることゝはなりぬるやらん」。

慈悲、「されば、妾と今一人の隣り人と打ち連れて、ゆくりなくも此の連れなる友の許を音なひしは、丁度此の友が旅の支度を整のへ

居たる時なりけり。かくて家に入りて其の有樣を見、さて其の仔細を尋ねけるに、友は今しも迎へられて其の良人の許に行く處なりと云ひ、且つは其の夢の中にて、夫の今棲める珍らしき國や、其の處の君と共に飲食を共にし、限り無き命を有てる者と交らひて琴彈きすさび、また其の頭に冕を戴だきて、絶えず讃美と感謝の歌を唱へ居るさまなど、たしかに見つる由を語りたり。さても、友の斯く語り居る折しも、妾の心燃え立つ如くなりぬるやう覺えたり。されば、妾私かに思ひぬるやう、其の事もし眞ならんには、妾も父と母と故郷とを後に見棄てゝだに、叶ふことならば基督女信者と共に行きて見まほしと。かくて妾は我が里の行末の偏に危ふきものなるを悟るにつれて、猶ほ深くも友の云へる事の眞なるやをも問ひきはめ、また妾をも共に連れ立ちなんやと願ひたり。さりとて後に殘れる多くの親族やからを思ひやりては、元より空に名殘を惜むとにはあらざれども、なほ最とゞしく此の胸をこそ痛めつれ。されば妾の來りぬるは全く心よりの願ひにて、なほ叶はゞ基督女信者と共に、其の夫および其の大君の御許にまでも參りなんと乞ひ願ふなり」。

釋義、「卿の出で立つことや亦よろし、げにも卿は眞理の上に固く信を置きたり。あゝ卿こそ彼のルツなれや、彼女はナオミと其の神ヱホバを愛するが爲めに、其の父母および生れたる國を離れ、見ず識らずの民の中に來りしにより、『ねがはくはヱホバ汝の行爲に報い給へ、ねがはくはイスラエルの神ヱホバ即はち汝が其の翼の下に身を寄せんとて來れる者、汝に十分の報施を賜はんことを』、と云はれたるならずや」。

（ルツ路得二ノ十一、十二）

さる程に晩餐も果てゝ、やがて人々臥戸に退ぞきしが、獨り慈悲は枕に着けども眠りもあへず、今まで其の心を曇らせぬる行末の疑がひ晴れて、云ひ知らぬ喜こびの溢れぬるに、且つ感謝し且つ祈り

て神の恩惠を讃稱へてけり。

明くれば人々朝日と共に起き出でゝ、早くも出立の支度を爲しけるに、釋義者は之れを止どめ、「此處よりは順序正しく進むべき筈なれば」、と云ひて今暫らく留まるやう云ひ含めたり。また初め戸口に出で迎へつる彼の少女を招き、「此の方々を園内なる浴場に案内して、旅路の垢をすゝぎ潔められよ」、と命じたり。されば少女無邪氣は其の言ひ付けに從がひて人々を彼處に案内し、さて此の家の主人の心盡しにて、すべて旅に上らるゝ人々に此の事を勸むるなりと語りたり。

其の時皆々之れに入りて其の身を洗ひ潔めしが、やがて清けく麗はしくなりぬるのみかは、其の節々も最どゝ力強くなりて、氣も爽やかなるを覺えたり、かくて人々前よりは一層美くしき者となりて出で來れり。

（出埃及記十三、八、十）

されば人々庭園より歸へり行きけるとき、釋義者はつく〳〵と打ち見やりて、「あゝ月の如く麗はしきかな」、と云へり。次に潔められたる者の記號となるべき印を取り寄せ、之れを人々の目の間に捺したり、此の印と云ふは、昔しエジプトの國より出で來れる時、イスラエルの子等が食らへりてふ酵入れぬパンに因める者なりけり。此の記號は又飾りともなりける程に、おのづから各自の顏ばせに一としほの美くしさ加はり、且つは品よく重みさへ添ひて、宛ながら天の使も此くやと思はれつる程なり。

そのとき釋義者は更に彼の少女を指し招き、「此の方々の爲めに備への衣を取り來られよ」、と云ひ含めたり。されば少女は出で行きて、やがて白妙の衣を取り來り、之れを主人の前に置きたり。此は純白にして汚れなく、最と麗はしき麻の衣なりけり。さる程に人々命せらるゝまゝに之れと着更へけるが、その麗はしく匂やかなるを見て、

人々互ひに己れのことを忘れ、たゞ他の上をのみ美くしと思ひて、さては、一卿は妾よりも勝れて麗はし」、と一人の云へば、「げに卿こそ妾よりは遥かに美くしけれ」、と一人の答へて、互ひに他を己れに勝れりと語り合へり、子供たちも亦打ち呆れて、此は如何なる樣ならんと訝かり居たり。

第三程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
あまつみそのゝ春をしぞ思ふ。

さる程に、釋義者は大勇となん呼べる一人の家僕を招き、楯と兜および劔を取らしめ、さて、「いざ我が娘たちを導びきて、次の泊りなる美麗宮に案内せよかし」、と命じければ、此の僕いはるゝまゝに其の武器を取り、やがて先きに立ちて出で立ちなんとす　されば釋義者は一同に向ひて、「道中恙無かれかし」、と云ふ、家の内の誰れ彼れも之れを見送りて暫しが程は從がひたり。かくて人々歌ひつゝ其の道を續けたり。

たゞ十字架を　日毎に負ひ
こゝろ盡くして　主につかへん。
見よや浮世は　朽ちたる木の
外のみ榮えて　心うとき。
あゝ、駒鳥や　蜘蛛の糸の
亂るゝふしよ　おのづから
世の仇しさを　をしへがほなる。
さて我れ夢の中に見けるに、彼の人々は大勇を先きに立てゝ愈よ其の途を進みけるが、さて進む程に、曩きに基督信者の背負ひたる

重荷の、忽ち其の肩より轉げ落ちて彼の墓の中に入りたる場所に着きたり。されば人々此處に少時歩みを止どめ、神の妙なる恩惠を讃め稱へたり。其の時基督女信者の云へるやう、「さても我身今想ひ起しぬることあり、そは曩きに彼の門に在りけるとき、『我れ語と行爲とに依りて赦をあたふ、語とは罪の赦の約束なり、行爲とは我が夫れを得つる仕方なり』、と云はれしことなり、其の約束と云へる事に就きては、我身も些さか悟る處あれど、行爲に依りて、又は夫れを得つる仕方に依りて赦さるゝと云ふは如何なる事ならん、大勇どのは定めし委しくも知らるべきに、何とぞ其の越むきを我らに語り聞かされよ」。

大勇、「さて、行爲に依りて罪の赦さるゝと云ふは、或る人他の身代はりとなりて罪の赦を得たりと云ふことなり。げにや卿を始め慈悲や子供たちの赦されたるも、全く他の人のお蔭に依ることなり、乃はち卿たちを許して彼の門に入らしめたる人、卿たちの身代はりとなり、二たつの仕方によりて罪の赦免を得られたるなり、一とつは自から義しきを行なひ遂げて卿たちの罪を掩ひ、また其の血を流して卿たちを洗ひ潔めたるなり」。

基女、「さるにても其の義しきを我らに分たれたりとせば、彼の方自身は如何にせらるゝならん」。

大勇、「いや、彼の君は自からにも足らひ、また卿らの求めにも餘る計りの義しきを有たるゝなり」。

基女、「なほ明きらかにも解き示めされよ」。

大勇、「心より喜びて之れを爲すべし、さり乍ら先づ定め置くべき一事あり、即はち今や我らの語らんとする彼の君は、世に比ひなき方なりと云ふことなり。彼の君は一とつの身に、見分け安けれども分ち難き二たつの性質を有ち、其の性質には又兩つながら各々備は

りたる義あり、玄かも其の義は孰れも其の性質に無くてならぬ者にて、其の義しきを取り去れば、おのづから其の性質も滅する程なり。されば我らは其等の義を分ち受けて自から義しき者とならんこと、元より望むべきことに非ず。然るに彼の君の内には、此の二つの分ち難き性質の外に尙ほ一とつの義あり、此は神たる性質に屬する義にもあらず、また人たる性質に屬する義にもあらず、全く其の二つの性質の中に立てる義なり。されば之れこそ彼の君に委ねられたる中保の務を果さんため、神の備へ給ふ義なりとも云ふべけれ。若し第一の義を分かたば、そは神たる性を分かつなり、第二の義を分かたば、是れ其の無垢なる人たる性を分かつなり、されど第三の者を分かたば、それこそ其の中保の任務を完うする者にて、彼の君は此の義をもて神の聖旨を行なひ、かくて罪惡を掩ひて、世の罪人を救はるゝなり。されば、『一人の逆に由りて多く罪人とせられし如く、

●羅馬五ノ十九、

一人の順によりて多く義とせらるべし』、ともあることなり」。

基女、「さりとては、其の餘の二たつの義は我らに取りて格別益ともならぬ者にや」。

大勇、「さなり、此の二たつとても元より其の性質と任務の上に無くてならぬ者なれども、彼の第三の者と一とつには爲すべきに非ず、唯だ之れ有ればこそ第三の者も初めて其の目的を達するを得るなれ。其の神たる性の義は、之れに順の德を與へ、其の人たる性の義は、之れに其の順を以て義しきを行なふ能を與へ、而して此の二つの性の中に立てる義は、之れに其の委ねられたる任務の業を行なふ權威を與ふるなり。

されば、此處に神たるキリストに取りて不用なる一とつの義あり、そはキリストは其れ無くとも神たればなり、また此處に人たるキリストに取りても不用なる一とつの義あり、そはキリストは其れ無く

●羅馬五ノ十七、

ども完き人たればなり、かくて又此處に神人たるキリストに取りて不用なる一とつの義あり、そはキリストは其れ無くとも完く神にして人たる者なればなり。斯かる次第にてキリストには神としても、又神人としても、自身に取りて不用なる一とつの義あり、乃はち罪の赦免の義なり、是れキリスト自身には全く用なき者なるが故に、惜しみなく他に分かち與へらるゝなり。さてこそ義の賜物とは云はれたれ。主たるキリスト イエス既に其の身を律法の下に置かれたれば、此の義は是非とも棄てられざるべからず、そは律法は之れを縛して義しきを行なはしめざるのみならず、また慈悲を施こすことをも妨たぐるなり。さるからに、キリスト若し二たつの上衣を有たれたりとせんに、律法に從がへば、是非とも其の一とつを取りて之れを有たざる者に與へざるべからず、之かもキリストは實に其の二たつを有たれたり。さればこそ、其の一とつは自身の爲めにし、今

●羅馬八ノ三、四十

一とつは持たざる者の爲めに惜しみなく分かち與へらるゝなれ。かくてぞ、基督女信者や慈悲や又子供たち皆々の上に來れる罪の赦免も、實は他に一人の身代はり有るに依るなり。げにや卿たちの主キリストこそ、誰れ彼れと無く來り求むる者を憐れみて其の身代はりとなり、また其の身代はりたることに依りて得る處を之れに分かち與へらるゝなれ。

玄かるに、身代はりに依りて他の罪を赦さん爲めには、それ相應の身の代を拂ふべき筈なり。抑も罪惡は我らを義しき律法の呪咀の下に渡したり、今此の呪咀より救はれんとならば、是非とも贖罪の道に依り、相當の價を支拂はざるべからず、其の價とは則はち卿たちの主の血しほにて、主は卿たちに代はり、卿たちの罪惡ゆゑに其の死を遂げ給へり。かくて其の血しほに依りて卿たちを罪惡より贖ひ、また其の義に依りて卿たちの汚れ破れたる魂しひをも掩はる

ゝなり。之れが爲め、神來りて世を審判し給はん時も、卿たちには罰を加へずして看過し給ふべし」。

基女、「こは勇ましき話なり、げに語と行爲に依りて赦さるゝてふことも、淺からぬ意義なることを悟りたり。いかにや慈悲どのよ、我らつとめて此の事を意に留むべきならずや、また我が幼な子たちよ、卿らも能く〳〵之れを憶へよかし。さるにても、君よ、憂きに我が夫基督信者が、其の肩より彼の重荷を取り去られ、それが爲め喜こび躍りたることありしも、全く此の事ゆゑにあらざりしや」。

大勇、「云はるゝ通りなり、誰れとて切ること叶はざる重荷の紐の斷ち切られしは、全く此の信仰に依ることなり、また十字架の下に至るまで苦しくも其の重荷の取り去られざりしは、之れに依りて明かに此の德を覺えしめんとてなりしなり」。

基女、「我身も然るべしと思ひたり、今までにも我が心は樂しく爽やかなるを覺えしが、今はまた其の樂しく爽やかなること以前にも十倍せり。我身の感ずる處は最と些さかなれど、なほ之れに依りて推して考ふるに、若し世にも憂たてく心重き人ありて、我身の今在るがやうに此の處に來り、また此の狀を見もし信じも爲たらんには、まことに其の喜悅は如何ばかりなるべき」。

大勇、「此等の事を親しく見また思ひはかるにつけては、唯に重荷の苦の取り去られて、心に慰藉を受くるのみならず、實は夫れと共に云ひ難き愛慕の念を興すことなり。元より約束の語のみならず、實際行爲に依りて罪の赦免の與へられたるを思ひ悟らば、誰れか之れが爲めに感動せざらん、かくて己が身代はりとなりたる人を愛し慕ふに至るは當然ならずや」。

基女、「まことに云はるゝ通りなり。我れゆゑにこそ血を流されたりと思ひ知りては、我が心も破れて最と〻血を吐く思ひぞする。あ

あ、愛の君、あゝ、恩の君、君は我身を買ひ給へり、我身は君の有なり、君は我が爲めに萬倍にも餘る身の代を拂ひて我身を贖なひ給へり、されば我身のすべては君の有なるぞかし。あゝ思へば、曩きに我夫の此處に佇立みて涙に咽び、たゞ去りあへでのみ低徊ひぬるも道理なれや、定めし我身の共に在りつらんをこそ欲ひつらめ、今となりて我身の情なかりし愚かさを、また彌や更らに思ひ知るなり。いかに慈悲どのよ、卿の父上や母上も共に此處に在さばやと思ひやらる、また我身は彼の臆病婦人、さては又淫乱夫人なんども此處に來りなんことを心より欲ふなり、彼の人々如何ほど情慾盛んなりとも、また如何ほど意氣地なく恐るゝ者たりとも、一と度び此の樣を見たらんには、忽ち其の心感動して、悔い改ため、終には良き旅人となるべしと思はるゝなり」。

大勇、「卿は今しも愛に熱して斯くは語らるゝなり、去かも常に其の如く有り得べしと思はるゝにや。且つ又此の事は凡ての人に陽はに示めさるべきにあらず、またイエスの血を流さるゝを見たる人とても悉く感に打たるゝと云ふにもあらず。現に十字架の傍はらには親しく主の血しほの地に滴たるを見居たる者數多あり、されど彼等は中々に感動すべくもあらで、却つて之れを嘲み笑ひ、また其の弟子となるに引きかへて之れに逆らひ、いよゝ其の心を頑くなにしつるなり。されば卿たちの斯くあるは全く特別のことにて、我が先きに語りつることを篤く思ひはかりしに依り、聖き感動を催ほしぬるなり。彼の牝鷄のことを思ひ起されよ、分け隔てなく凡ての雛を呼ぶ時は、何の餌も與へられざりしこと卿たちの見つる處なり、されば是れも亦殊更の恩惠によると知らるべし」。

さて我れ夢の中に見けるに、彼の人々愈よ進み行きて、曩きに彼の基督信者が其の道中にて、淺薄、懈怠、放肆と云へる三人の者の

眠れるを見たる處に着きたりしが、此は如何に、彼の者どもは少し く距れたる道ばたの木に懸けられ、皆な鎖もて縊られ居たり。

されば慈悲は之れを見て其の案内者に向ひ、「此の三個の人は何者ならん、また何とて此くは縊られつる事やらん」、と云ふ。

大勇、「此の三人は其の性質良からぬ者どもにて、自から旅人たるべき眞の志ざし無きのみかは、出來る限り多くの他をも妨たげつるなり。元より自からは愚かなる怠惰者なるが、なほ出來るかぎり多くの者を説き伏せて自分らの如く爲さんとし、また放肆に行末の事を獨り合點するやう敎へけることなり。曩きに基督信者が通りける頃は眠りて在りしが、今は早や縊られ居るこそ憂たてしや」。

慈悲、「さりとては、彼等に説き伏せられたる者もありけるにや」。

大勇、「まことに之れあり、彼等は幾人をか説き伏せて其の道をあやまらせたり。其の中には徐歩と云はれし男もあり、また氣拔、腑拔、未練垂、眠氣頭など云へる人々、および間抜と呼ばれし年若き婦人など、孰れも其の道を迷ひ出でゝ彼等の如くなりたるなり。且つ又彼等は我が主の事を惡しざまに云ひ觸らし、主は酷く我らを追ひ使ふ者なりとぞ云ふなる。また善き御國の事をも同じく惡しざまに云ひ觸らしつるなり、また主の從者の最と善き者をさへ云ひ罵りて、氣むづかしく差し出がましきお世話やきなりなどゝ云へり。さては又、神のパンを指して粃殼なりと云ひ、神の子供の慰さむ處を空想なりと云ひ、また旅人の勞苦を見て、是れ役にも立たぬ骨折りなりと云へり」。

其時基督女信者も言葉を挾み、「さもありけるか、さては此の仕置こそ彼の人々に相應しく、なか〳〵憐れと思ひやるべき要もなし。また此の街道に近く置かれたるも最と宜し、かくてぞ多くの者の好き懲戒ともなりぬべし。さるにても、彼の者どもの罪狀を捨札に認

ため置かば一層よろしかるべし」。

大勇、「卿今少しく石垣の方に寄られなば、明らかに其の事あるを見らるべし」。

慈悲、「さても我らの此處に來らざる前きに彼の人々の斯かる仕置に遇ひたりしは、我らに取りて最とも仕合せなる事なりと思はる、さも無からんには、我ら纖弱き女の身とて、如何なる目に逢はされしやも知り難きを、あゝ、あゝ、彼の人々の名は朽ち果て、其の屍は木に晒らされ、かくて其の罪科は末永く懲戒となりて殘れかし」。

かく云ひ了りて、さて其の心を歌ひ出でけるやう、

「わが魂しひよ　心して
道を怠たる　こゝことなかれ、
見よ、みせしめの　木の空に
懸りて朽つる　惡しき名を」。

（以上三十四、八十九、九十ノ結）

さる程に、人々進み行きて終に困難峠の麓に達してけり。されば大勇は人々を案内して曩きに基督信者の此處にて出遇ひつる事どもを語り、先づ彼の泉水のほとりに連れ行きて、「見られよ、此れぞ基督信者が登山のみぎり、先づ飲みて力を得たる泉水なり。其の頃は此の水澄み渡りて最と善かりしが、今は濁りて見る影もなし、是れ實は旅人の此處に來りて其の渴を醫やすをねたみ、足もて之れを濁す者あればなり」、と云へば、慈悲は眉打ち顰め、「さりとは憂たてし、何とて斯かるねたみだては爲ることならん」、「そは兎もあれ、此の水とても善き器物の奇麗なるに盛りなば用ひられずと云ふことなし、かくせば其の濁り底の方に沈みて、水は却つて清く澄み渡るなり」、と打ち語る。斯かりしかば基督女信者を始め連れの人々皆な其の言葉に從ひ、彼の水を一とつの壺に盛りて、暫らく其の濁りの沈むを待ち、やがて皆々之れを飲みたり。

次に大勇は此の麓に當りて彼の儀式者、および僞善者の兩人が迷ひ行きたる二たつの拔け道を示し、「さても、劔呑なるは此等の道にて、曩きに基督信者の通りけるときにも、二個の人此處にて失なはれつることなり。また其の後ち見らるゝごとく、杭を打ち、鎖を張り、溝を掘りなどして通行止めとなしあれど、なほ此の峠に登る困難を厭ひて、却つて之れに紛れ入らんとする者あり」、と云ふ。

（エ）箴言十三ノ十五、

基女、「さるにても『悖戻者の途は艱難なり』、とあるならずや。此の途に入り行く人にして其の首の骨を折ることなくば不思議ども云ひてまし」。

大勇、「彼等は全く向ふ見ずなり、げにや王の從者たちにても、偶ま彼等を呼び止めて其の途の良かるまじきことを告げ、また危難多き由を注意しやることあらんには、彼等は忽ち之れを罵り返へして云ふ、『汝がヱホバの名をもて我らに述べし言は我ら聽かじ、我らは必らず我らの口より出づる言を行なはん』、と。云かも、今少しく能く見られよ、此の途は棒杭、鎖、溝などの外に、生垣さへ結ひ繞らして充分用心を促がしあるに、彼等は猶ほ夫れにも搆はず行かんとはするなり」。

（オ）箴言十五ノ十九、

基女、「彼の人たちは怠惰者なり、登り坂の困難を厭ひて憂き事と思ふなり。是れこそ、『惰たる者の道は棘の籬に似たり』、と云はれたる者なれ。まことや彼の人達は此の峠に登り、また都まで殘りの旅を續けんよりも、落し穴に入ることを寧そ勝れりとすることなるべし」。

さる程に、人々打ち立ちて愈よ峠にさしかゝり、やがて互に登り始めたり、されど登るに連れて基督女信者は息苦しさを覺え、「あゝ此は堪へ難き難所なり、かくては安逸を貪るものゝ、其の魂しひを棄てゝだに安き途に行かんとすること無理ならず」、と云へば、慈悲

ヨハ太十一ノ二十八、

も之れに尾ぎて、「妾は暫し憩はまし」、と云ふ、また子供たちの中にても最と年下なる者泣き出でけるに、大勇はやがて之れを抱き上げ、「いざ、いざ、此處にて弱るべきことかは、今少しく上に行かば、處の主が設け給へる小亭あるに、いざ勵みて登られよ」、と云ひつゝ先きに立ちて導びきたり。

かくて人々かの小亭に着きけるが、いづれも濡どの汗に濕ほひ居たり。其の時慈悲の云へるやう、「およそ勞れたる者に取りて休息ほど心地よき者は無からん、また斯くも善き休息所を設けて旅人を勞らひ給ふ主の恩惠は如何ばかりぞや。此の小亭につきては妾も色々聞きけることあり、されど之れを見るは初めてなり。さるにても彼の基督信者どのは此處に居眠りして、辛き目を見られたりと云ふことなれば、我らは眠らぬやう用心すべし」。

大勇は又子供たちに打ち向ひ、「さても、幼なき人々よ、卿たちは恙もあらぬにや、また猶ほ此の道中を續くべしと思ふにや」、と云へば、かの最と幼なき者答へけるやう、「我身は大かた氣を失なはんとせし程なりしが、卿のお蔭にて嬉しくも此處には着きたり。今我身は母人の常々云ひ聞かされしことを思ひ出でぬ、そは天に行く途は梯子の如く、地獄の途は下り坂の如しと云ふことなり。されば我身は坂を下りて死の方に行かんより、梯子を上りて生命の方に行かましと思ふなり」。

其時慈悲は之れに向ひて、「されど古諺にも『途は下り坂くだり坂』とありて、何よりも面倒なく容易きことを云ふならずや」、と云へば、ヤコブ（是れ彼の幼なき子の名なり）は頭を打ち振りて、「否とよ、やがて又へりくだるてふ下り坂も最と困難なる者となりぬべし」、と云ふに、大勇は言葉を挾みて、「好き子よ、好き子よ、そは申し分なき答へぶりなり」、と云ふ。かくて幼なき子は顏打ち赤らめ、また慈悲は微

笑みたり。

折しも基督女信者は皆々を招き、「いざ、打ち寛ろぎて此の甘き物を味はゝれずや、此は彼の釋義者の家を暇乞ひしける時、我身に與へられし石榴の實なり、我身は又少しの蜜房と元氣を強むる飲料をも貰らひ受けたり」、と云へば、慈悲は打ち頷づき、「げに彼の人の卿一人を呼びけるにより、定めし何か與へられつらんと思ひしことなり」、と云ふ。子供たちも亦、「げに其の事ありたり」、と云ひ合へり。

其の時基督女信者は言葉をつぎ、「さるにて始め家を出でける時、卿が快くも道連れとなられしを愛でゝ、何にまれ道中にて我が受くる善きものは卿に分かたんと約束せしことなるが、今もまた其の通り爲すべきなり」、と云ひて各々に分かち與へ皆々共に食してけり。基督女信者は又大勇にも之れを進むるとて、「君よ、卿も我らの仲間入りを爲給はずや」、と云へば、「否とよ、卿たちは猶ほ旅を續くべければ、それらの物に依りて行く〳〵益をも受けらるべく、我身は又やがてわが家に歸るべきに、彼處にては日毎に之れを食するなり」、と答へてけり。

第四程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
あまつみそのゝ春をしぞ思ふ。

かくて人々且つ飲み且つ食らひ、また打ち語らひつゝ暫し憩ひける程に、案内者は之れを促がし、「日も稍に暮れなんとす、よろしく皆な起ち上りて支度を爲し、此度は子ば出で立ちなん」、と云へば、供たちを先き立てゝ進みたり。然るに基督女信者は飲料の壜を置き忘れしかば、また子供の一人を後に送りて其を取り來らせぬるに、

慈悲は之れを見て、「さても此處は物忘れする場所なりと思はる、曩きには基督信者其の卷物を失なひ、今はまた基督女信者其の壜を留き忘る、君よ、之れには何か仔細のあることにや、」と云ふ。其の時案内者の答へけるやう、「されば、眠ることゝ、物忘れすることより外に仔細もあらず、或る人は目を醒まして居るべきに眠り、また或る人は意に留むべき時に打ち忘るゝことをす、之れが爲め道中の休み場にて物失なひをなすこと旅の衆には有り勝ちの事なり。之かも旅人は其の持てる物を最と大切にして忘るゝことなく、また目をさまして用心すべき筈なり、之れを怠たりなば其の喜悦も涙となり、晴れたる氣も曇らひなんこと、彼の基督信者の話にても明らかなるべし」。

さて愈よ進み行きて、唯或る仕置臺のある處に着きたり、此處は曩きに猜疑と臆病の兩人基督信者に出で遇ひ、獅子の恐ろしさを逃べ立てゝ連れ歸へらんと唆のかしたる處なり。さて此の仕置臺の前には一とつの棄札立てられ、それに一首の歌と此の仕置臺の立てられたる理由とを書き記されたり。

一、此の仕置臺は凡て臆病と猜疑とに依りて恐怖を爲し、其の道中を中止する者を罰する所なり。かの猜疑および臆病の兩人も、旅人基督信者の道中を妨たげんと爲したる咎に依り、此の臺上にて燃ゆる鐵の火焔の舌もて燒き殺されたり。

行く末を思ひな捨てそ旅人の
道のさはりはよし繁くとも。

慈悲は之れを讀みて數多度び歎息し、「まことや愛する人の言葉にも、『あざむきの舌よ汝に何をあたへられ、何を加へらるべきか、ますらをの利き箭と金雀花の熱き炭となり』、とあるをさへ思ひ合はさる」、と云へり。

（詩百二十ノ三、四）

かくて又進み行く程に、愈よ彼の獅子の見ゆる處に着きけり。元より大勇は強き人なれば、獅子などを恐るゝことは無けれど、先きに進める子供たちは之れに近づきて忽ち恐怖を爲し、皆な後込みして後の方に歸へり行きたり。案内者は之れを見て打ちほゝゑみ、「いかにや、幼なき人たち、卿らは何の危難も無き間は好んで先きに行くことをし、僅かに獅子の影を見るとては、此く早くも後返りを爲るものにや」、と云ふ。

其の時大勇は劔を拔き持ち、獅子ありとも物かはと旅人を勵まして進みたり、折しも一人の巨漢ありて此の道筋に出で來る、此は其の名を殘忍坊と呼び、また其の旅人を殺すに依りて血塗入道とも呼ばれ、實は彼の獅子の後援をする者なり、彼の者案内者に向ひて、「何とて汝等は此處に來るぞや」、と打ち呼ばゝる。

されば案内者は言葉雄々しく之れに答へて、「此は旅の婦人と子供たちにて、是非なく此の道筋を通るところなるに、獅子や汝などの要あることかは」。

殘忍、「物々しや、此處は其の人々の通り行くべき途にあらず、されば我れ獅子の後援を爲して、彼の者どもを止めん爲めに出で來れり」。

まことや彼の獅子の猛惡なると、殘忍なる後援の巨漢のあるにより、此の頃は人の往來も大かた打ち絶え、草生ひ茂りて途を埋むる計りなりけり。

其の時基督女信者の云へるやう、「知らずや、『その大路は通る者なく途行く人は徑を歩みたるにもせよ、今我れ起りぬれば此くはあらせじ、我れ起りてイスラエルに母となる』、ともあることなり」。

殘忍坊は之れを聞きて首打ちふり、よし何人の起りぬるとも此くあるべしとて、獅子を指して誓ひをなし、疾く〳〵此の道を去り行

かずやと罵りたり。

さるからに大勇は今は早や是れまでなりと、彼の殘忍に進み近づき、劒をもて玄たゝかに斬り付けたり。

其の時彼の男はたじろきながらも打ち叫びて、「さては汝は我れを我が領内にて殺さんとするか」、と云ふ。

大勇、「此は我が大君の街道にて、よしや汝此處に獅子を置きたるにもせよ、汝が領分にはあらず、また此の婦人や子供たちも、元より纖弱き身にはあれど、さりとて獅子なんどの爲めに其の道を捨つる者にあらず」。

かく云ひて又一と太刀袈裟がけにて彼の男を斬り倒ふし、次に其の兜を打ち碎き、また其の腕を打ち落したり。其の時巨漢は甚くも唸り出でしが、其の唸り聲最と凄まじかりければ、婦人たちは皆な恐れたり、玄かも其の苦轉して終に息絶えたるを見て、皆な心落ち居て喜こびたり。其時大勇は人々に向ひ、「いざ我れに從がはれよ、最早や獅子の害を恐るゝにも及ぶまじければ」、と云ふ。元より其の後援殘忍を失なひつることなれば、獅子どもは鎖りに繋ながれ居ること、して如何にとも爲ること叶はず、かくて婦人たちは戰のきながらも其の前を過ぎ、また幼な子たちは色青ざめて見えつれど、玄かも何の害をも受くることなく、皆な無事に通り過ぎたり。

さる程に、彼の門衛の小舍も見ゆるやうになりしかば、人々直ちに之れに向ひて進みたり、また此のあたりは夜途に便惡しく危險多かりければ、いづれも一層歩みを急がせたり。さて愈よ門に達して案内者之れを打ち音なへば、門衛は内より聲を掛けて、「其處なるは誰れ人ぞや」、と云ふ。大勇之れに答へて、「我れなり」、と云へば、彼の人早くも其の聲を聞き知りて出で來れり。元より案内者はいつも旅人を嚮導して此處に來るにより、前方よりの相識たるなり。門衛

やがて出で來りて門を開き、案内者の其の前に立てるを見て、(婦人たちは其の後ろに在りて見えざりしに)「これは〳〵大勇どの、何とて此の夜更け此處には來られつるぞや」、と訝かり問へば、「されば、道にて彼の獅子の後援する巨漢に會はざりせば、疾くにも此處には着くべかりしを、我れ彼の者と手痛く戰かひて、終に之れを斬り倒ふせしが、其の爲め數多の時間を費やしたり。實は我れ我が主人の命により、今宵此處に宿るべき旅人たちを案内してけるなり」、と云ふ。

門衛、「さもありけるか、いざ卿も先づ内に入り、今夜は此處に留まられよ」。

大勇、「いやとよ、我れは今夜わが主の許に歸るべし」。

基女、「あはれ、君よ、卿の恩は我等永く忘るまじ、卿は雄々しき心もて我らを勵まし、我らの爲めに烈しき戰かひをなし、我等を愛くしみ、また眞實を諭されたり、かくて卿と別れなんことの堪へ難さよ」。

慈悲も亦云ふ、「我ら纖弱き女の身の、かくばかり艱難多き道中にて、賴りとなるべき力ある友なくては如何にかせん、あはれ此の旅路の果てなん日まで、卿の連れ立ち行かれん事こそ願はしけれ」。

彼の年下なるヤコブも亦云ふ、「のふ、君よ、我らと共に行きて、我らを助けたまはれ、我らは力弱く、去かも此の道は最とも危きものなるに」。

大勇、「我身は我が主の命の儘なるべく、主もし我れを許して終りまで卿たちの案内を爲させ給はんとならば、我身は悅こびて卿たちに連れ立つべし。されど卿たちは初めにあやまりたり、そは主の我身に命じて卿たちの案内に出だし給へる時、卿たち若し旅路の果てまで然せんことを主に求めたりせば、必らず容されも爲べかりしを、

それは兎も角も、我れは一と先づ歸るべし。さらば基督女信者どのよ、また和子たちよ、さらば暇を申すべし」。

さる程に、門衛守護は基督女信者に向ひて、其の里や親戚などのことを尋ねけるにぞ、彼の婦人は之れに答へて、「我身は滅亡の城下より來れる者にて、連合におくれたる寡婦なり、我が夫は旅人にて基督信者と名乘りたり」、と云へば、門衛は打ち驚ろき、「さては彼の人は卿の良人にてありけるか」、「云はるゝ通りなり、此の幼な子たちは其の忘れ形見、またあれなる方は」、と云ひつゝ慈悲を指さし、「我が同じ郷人の一人なり」、と打ち語れり。其の時門衛は傍への鐘を打ち鳴らせしが、此は斯かる折に打ち鳴らす習らはしなれば、やがて其の響きに連れて處女の一人出で來たれり、其の名は謙遜とぞ云ふなる。門衛は之れに向ひて、「此は彼の基督信者の妻なる基督女信者と其の子供たちの道中にて立ち寄られたる者なるが、何卒其の由取り次ぎして給はれかし」、と云ふに、處女はやがて内に行きて其の趣きを語りたり。さても處女が口唇より其の知らせの漏れぬる時、内なる人々の喜こびたる賑はしさは如何ばかりなりけん。

されば人々急ぎ出で來りて之れを迎へ、別けても最と眞面目なる人たち進み出でゝ、「いざ、基督女信者どのとやら、いざ、いざ、内に來られよ、また連れの方々も、いざ、こなたへ通られよ」、と挨拶してけり。さるからに孰れも會釋して打ち通り、一とつの大きやかなる部屋に入りて待つほどもなく、此の家の長なる人も出で來りて人々を迎へ、「あゝ能くこそ來りつれ、神の恩惠の器よ、我が友よ、げに能くこそ來られつれ」、と云ひて一人々々に接吻せり。

さて其の夜も既に更けたるに、旅人等は長途の疲れに添へて、彼の恐ろしき獅子や戰かひを目のあたり見て其の氣さへも甚く疲れ居れば、旁がた早く休みに就かんことを欲ひたり。されど、此の家の

人々は豫て備への羔羊の馳走を取り出で、「先づ之れを食ひて力づかれよ」、と進めたり。かくて人々食し終りて祈禱と詩と賦とを捧げ、やがて重ねて休みに就かんことを願ひてけり。

（出埃及十二ノ二、十一、約翰一ノ二十九、）

其の時基督女信者は、「まことに面伏せなる申し事ながら、若し曩きに我が夫の休みぬる部屋にて我らも休むことを許されんには、あはれ如何ばかりか嬉しきことならん」、と云ひ出でけるに、直ちに其の如く取り計らはれて、皆々彼の部屋に退ぞきたり。さて各自休みに就きける時、基督女信者と慈悲とは節に合ひたる談話を始めたり。

基女、「さても我が夫の曩きに旅立ちける頃、我身も此く其の後を慕ふに至るべしとは、實は些さかだも思はざりけることなり」。

慈悲、「玄かも亦、今此く卿の爲らるゝやうに、同じ部屋また同じ寢床にて休むべしとは」。

基女、「また安慰をもて夫と相見え、玄かも主君の之れと共に在し給ふを拜むべしとは、共に些さかだも思ひ寄らざりしことなれど、今は中々其の事あるべきを信ずるなり」。

慈悲、「暫らく、あの音は何事ならん」。

基女、「あゝ、妙なる音樂の調べ、是れこそ我らを歡こび迎ふる節なれ」。

慈悲、「げにや我らを歡こび迎ふるとて、家の内に音樂起り、心の内に音樂起り、また最と高き天にも音樂の起りぬるこそ妙なれや」。

かくて暫しが程語りつゞけて、終に皆々眠りに就きけり。

さて翌の朝ともなりて目醒める時、基督女信者は慈悲に向ひ、「此の夜さり卿は眠り乍らに打ち笑まれしが、定めし夢にても見られしならんと思はる」。

慈悲、「云はるゝ通り、一とつの樂しき夢を見たり、さるにても卿は確かに我身が笑ひたりと云はるゝにや」。

基女、「さなり、卿は心から打ち笑まれたり、先づ何卒其の夢物語を聞かされよ」。

慈悲、「さて、我身夢に淋しき處に唯一人居て、心に積もる憂き節を歎き居たり、程なく數多の人、我が歎く態を見聞かんとて我身の周圍に集ひ來たれるやう覺ゆ。かくて我身は歎きを續け、人々は之れを聞き居たり、やがて或る人は我身にむかひて打ち笑ひ、或る人は馬鹿者よと云ひ罵しり、また或る人々は我身を推し遣らんと爲し始めけり。折しもまた我身空打ち仰ぎて、一人の翼ある者我が方に來るを見たりと覺ゆ、さて其の者我身に臨みて云ふ、『慈悲よ、卿は何を歎くぞや』、と。されば我れ我が憂き節を告げゝるに彼の人親しく我が涙を拭ひ、また金銀の衣を我れに着せて云ふ、『平安汝に在れ』、と。また我が項に金索を掛け、我が耳に耳環を施こし、我が首には華美なる冠冕を加へたり。つぎに我が手を取り、『慈悲よ、いざ從が

以西結十六、八、十一

ひ來れかし』、と云ひて虛空遙かに上りしかば、我身も其の後につきて、終に黃金の門に達したり。其の時彼の人之れを音なひしに、其の門開かれて內に入りしかば、我身も亦其の後につきて寶座の在る處に至りしが、其處に在ます者我身に向ひて、『娘よ、能くこそ來りつれ』、と云はれたり。其の處の晴れやかに輝やける狀譬へんに物なく、きらめく星や日輪の麗はしさも之れには及ばじと見えたり。我身は卿の夫の彼處に在るを見つるやう覺ゆ、かくて程なく夢醒めたり。さるにても我身は打ち笑へるにや」。

基女、「笑へるかとや、さなり、さりとて斯くも目出度き夢を見ば、誰れかは打ち笑むことを爲ざらん。其の夢の始めの方は卿も眞實なりと知らるべく、やがては其の終りの方も眞實となるに至るべし。げにや、『神は一度二度と告げ示し給ふなれど人之れを曉らざるなり。人、熟睡する時または床に睡る時に、夢或ひは夜の間の異象の中に

約百記三十三ノ十四、一十六、

て、彼れ人の耳を啓き、其の教ふる處を印して堅うす』、ともあることにて、神は我らの眠れる間も我らを顧りみ、また其の御聲を聞かしめ給ふなり」。

慈悲、「我身は此の夢を見つるを喜こびとするなり。そはやがて其の如く成就すべく、其の時こそ再た重ねても打ち笑みなん」。

基女、「さて日も早や闌けたりと覺し、いざ、起き出でゝ此の上爲すべき事をも尋ねばや」。

慈悲、「我身は彼の謹慎、信心、また仁愛なる三人の處女の、其の容顏あてやかにして最と氣尙きを見るにつけ、今暫らく此の家に逗留して、親しみを交へばやと乞ひ欲ふなり。されば若し引き留めらるゝやうの事もあらんには、何卒快く承諾ひて逗留することゝせられよかし」。

基女、「そは先づ彼の人々の爲るやうを見ての事とせん」。

さて皆々起き出でゝ身支度を了れる頃、彼の處女たちも出で來りて各自に挨拶し、能く安息まれぬるやと尋ねてけり。

されば慈悲は之れに答へて、「最と良くこそ休みつれ、妾生れて此くばかり樂しき宿りを得しことあらず」、と云ふ。

其の時謹慎と信心の云へるやう、「卿たち若し今暫らく逗留せられんには、此の家の有らゆる物も卿たちに分たるべし」。

仁愛も亦言葉を添へて、「之かも最と〳〵快く與へられなん」、と云へり。

さる程に皆々其の意に從がひて、此處に一と月あまりも逗留し、互ひに志ざしを磨きて極めて有益に暮してけり。時に謹慎は子供たちと問答を爲して其の躾方を見ばやとて、基督女信者の許しを乞ひけるに、元より一議もなく承諾してければ、處女は先づ最と年下なる彼のヤコブより始めたり。

謹、「さても、ヤコブよ、卿を造りぬるは誰なるぞや」。

ヤ、「父なる神、子なる神、また聖靈なる神なり」。

謹、「賢こし、賢こし、さらば卿を救ひぬるは誰なるぞや」。

ヤ、「父なる神、子なる神、また聖靈なる神なり」。

謹、「之れも賢こき答へなり、さり乍ら父なる神は何に依りて卿を救はるゝならん」。

ヤ、「其の恩惠に依りてなり」。

謹、「子なる神は如何にぞや」。

ヤ、「其の義と、血と、死と、生命とによりて」。

謹、「さては聖靈なる神は如何にしてぞや」。

ヤ、「其の人を照らすこと、之れを新たにすること、また之れを護ることによりてなり」。

其の時謹愼は基督女信者の方に向ひて、「あゝ卿は美しくも善き躾を爲られたり。一番年下なる者さへ此く答へぬる上は同じ問答を繰り返へすまでもあるまじ、此度は次なるヨセフに尋ぬて見るべし」。

謹、「さて、ヨセフよ、卿は我身と問答を爲すべくや」。

ヨ、「喜こびて致すべし」。

謹、「さらば、人間とは如何なる者ぞや」。

ヨ、「そは道理を辨ふる動物にて、我が弟の云へるごとく神の造り給へる者なり」。

謹、「さても、救はるゝと云ふ言葉の中には、如何なる意味の籠れるならん」。

ヨ、「先づ此の人間が罪に依りて艱難と奴隷の境遇に落ちたることを想ひ起さするなり」。

謹、「さらば、三位一躰なる神の御救と云ふことに依りては、如何なる事をか思ひ合はするならん」。

ヨ、「是れ罪の力の最と強くして、宛ながら非道なる暴君の如く、

されば神の外に我らを其の手より離らする者なしと云ふこと、また神は人間を此の艱難の境遇より解き放ち給ふほど、之れを善くし又愛し給ふ事などなり」。

謹、「かくも愛たてき人間を救はるゝ神の聖旨は如何にぞや」。

ヨ、「神は之れに依りて其の聖名や、其の恩惠や、その公義やなどを頌めさせ給ふ、且つは又、其の造り給へる者に永遠の幸福を與へんと爲給ふなり」。

謹、「さて救はるゝは如何なる人々ならん」。

ヨ、「そは神の御救を喜こび受くる人たちなり」。

謹、「賢こし、賢こし、卿も母人の教を能く聞きたりと見ゆ」。

次に謹愼は次男なるサムエルに向ひ、「いざ、サムエルよ、我身と暫らく問答せずや」。

サム、「まことに喜こびて致すべし」。

謹、「さらば、天とは何ぞや」。

サム、「是れ神の住み給へる處にして、極めて榮えある場所なり」。

謹、「地獄は如何に」。

サム、「是れ罪と惡魔と死との棲所にて、極めて快鬧なる處なり」。

謹、「さて卿は何とて天に行くことを望むぞや」。

サム、「そは我れ神を見て倦むことなく之れに仕へ、基督に見えて限りなく之れを愛し、また一層親しく聖靈に充たされん爲めなり」。

謹、「最と賢こし、卿は中々の識者なり」。

次に彼の處女は長男なるマタイに向ひ、「さて、マタイよ、卿も我身と問答を爲すべくや」。

マ、「喜こびて致すべし」。

謹、「さらば我れ尋ぬべし、およそ神より前きに何にても生ける者ありしや」、

マ、「否な之れ無し、そは神は限り無き者にて在せばなり。また開闢の初めの日までは、神の外に生きとし生ける何物も在らざりき。抑もエホバは六日の間に天と地と海と其の中なる一切の物を造り給へり」。

謹、「さて、卿は聖書に就きて、如何に考ふるや」。

マ、「是れ神の聖けき御語なり」。

謹、「其の中には卿の悟り兼ぬる節々も無からずや」。

マ、「まことに之れあり、去かも夥多しくあり」。

謹、「さては斯かる處に讀み當る時、卿は如何にかせらるゝならん」。

マ、「神の賢きは我身たちの及ぶ處にあらず、されば我身に取りて神の善しと見給ふ處をのみ悟らしめ給へと祈るなり」。

謹、「たとへば、死せる者の復活と云ふことなどは、卿如何に信ずるぞや」。

慈悲慈善の名は麗はしい心よりこれを求めて行ふ者は稀れ也

MR. BRISK AND MERCY

'So the next time he comes he finds her at her old work, amaking of things for the poor. Then said he, What! always at it?'

[see p. 235

マ、「我身は人皆な葬むられしまゝの狀態にて、朽つることなく復活るべしと信ず、かく信ずるには二たつの理由あり、(一)、是れ神の約束なればなり、(二)、神は然か爲し給ふことを得ればなり」。

其の時謹慎は子供たち一同に向ひ、「さて卿たちは此の上にも母人の敎を聞き習らはれよ。また卿たちの爲めを思ひて善き話を爲しくる、者あらば、熱心に之れを聞かれよかし。また意を注めて天地萬物の敎ふる處をも窺がひ、別けても卿たちの父なる人が愛讀したる書物を讀み、深く味はひ思ふべし。我身も亦卿たちの此處に在る間は、及ぶ丈けの事を爲して卿たちを敎へなん。また我身に尋ぬる事もあらば、我身は喜こびて之れに答へ、卿たちの聖けき德を建つることに努めなん」、と打ち語れり。

さて此の家に宿りて一週も經ちぬる頃より、慈悲の許に度々訪なひ來て、懇ろ立てする男ありけり、其の人は名を急急氏と呼びて、

慈悲慈善の名は施はしの心より之を求めて行ふ者は稀れ也

MR. BRISK AND MERCY

'So the next time he comes he finds her at her old work, amaking of things for the poor. Then said he, What! always at it?'

For p. 235

マ、「我身は人皆な葬むられしまゝの狀態にて、朽つることなく復活るべしと信ず、かく信ずるには二たつの理由あり、(一)、是れ神の約束なればなり、(二)、神は然か爲し給ふことを得ればなり」。

其の時謹慎は子供たち一同に向ひ、「さて卿たちは此の上にも母人の敎を聞き習らはれよ。また卿たちの爲めを思ひて善き話を爲しくるゝ者あらば、熱心に之れを聞かれよかし。また意を注めて天地萬物の敎ふる處をも親がひ、別けても卿たちの父なる人が愛讀したる書物を讀み、深く味はひ思ふべし。我身も亦卿たちの此處に在る間は、及ぶ丈けの事を爲して卿たちを敎へなん。また我身に尋ぬる事もあらば、我身は喜こびて之れに答へ、卿たちの聖けき德を建つることに努めなん」、と打ち語れり。

さて此の家に宿りて一週も經ちぬる頃より、慈悲の許に度々訪なひ來て、懇ろ立てする男ありけり、其の人は名を急急氏と呼びて、

可なりに家柄もあり、宗教の道にも心ある樣見せかくれど、實は極めて俗なる人なり。

元と此の慈悲は眉目容貌麗はしく、其の心ばへも優しくして、常に自からの業は更なり、他の爲めにも勤しむ事を爲し、暇さへあればシャツや履下などを作りて、之れを乏しき者に分ち與へなどしけるを、彼の急急氏早くも垣間見て心を動かし、かくも勤しく立ち働らきて怠たること無きからには、定めし善き女房ともなりぬべしと、私かに其の思を焦がし居たり。

さるからに慈悲は事の由を打ち明けて此の家の處女たちに語り、彼の男の身の上に就きて尋ねけるに、處女たちは元より此の男の事を能く知り居りければ、此の人の極めて急急しき若人なること、また宗教の道にも心ありげに見ゆれど、實は善てふものゝ力に就きては何も知ること無かるべくや、などと答へてけり。

慈悲、「かくては全く頼み甲斐なし、斯からん者は却つて我が魂しひの障碍ともなりぬべきに」。

其の時謹慎は之れに向ひ、今まで通り貧しき者の爲めに力を盡すことを續けなば、やがて彼の男の思は冷め失すべく、格別其の氣を傷めて之れを遠ざくるにも及ぶまじと云へり。

されば其の後ち彼の男の來りける時、慈悲は貧しき者の爲めにとて、常のごとく仕事し居たり。急急氏は之れを見て、「何時とても能く御精の出ることや」、と云ふ。「されば他の爲め、また自身の爲めに勤しむなり」。「去て、卿は日毎に如何ほど儲けらるゝや」。「我身が斯かる仕事を爲すは、『善を行なひ善事に富み、惜しみなく施濟をなして人と共にし、かくて己れの爲めに善き基を蓄はへ、未來の備へを爲すべし、是れ眞の生を得ん爲めなり』、とあるに由る」。「さりとては之れをもて何とせらるゝぞ」。「裸なる者に施こし着するなり」。之れ

（ヨハネ第一書三ノ十八、十九）

を聞きて彼の男忽ちに興をさまし、再たび慈悲が許へは來ずなりたり。また人の其の理由を問ふ者あれば、彼の娘は可なりの綺量なれど、其の條件思はしからずと云ふめり。

さて彼の男去りて後ち謹慎の云へるやう、「いかにや、我身の云へる通り、急急氏は早や往にたり。定めし卿の事を惡しざまに云ひ觸らすことならん。彼のもの外見には宗教の道をも心がけ、また慈善慈悲を好むやうにも見ゆめれど、實は到底も卿と相合ふ仲とはなり難からん」。

慈悲、「我身は今まで誰にも云はざりつれど、度々嫁入の相談に會ひしことあり、されど孰れも我身の容貌に非難は無かりしも、みな當方の條件を嫌ひたり、かくて心の合ふ者とては無かりしなり」。

謹、「あはれ當今は慈悲と云ふこと唯だ其の名ばかりに過ぎず、實際之れを行なふにも、卿が立てたるやうの條件にては、能く堪へ得る者いと稀なり」。

慈悲、「げに誰も妻に迎ふる者なくば、我身は此の條件を良人とも守り、獨身にて世を終るまでなり、我身は此の性根を更ふること叶はず、また心にも添はざる者に身を任せんこと思ひも寄らぬ次第なり。我身に慈善と云へる一人の姉ありて、曩きに此の類ひの良からぬ人に緣付きしが、元より始終其の心折れ合はず、さりとて姉は其の思はくを立て通して、賴りなく貧しきものに親切を盡すことを勸め居りしが、やがて其の夫の爲めに罵り辱かしめられ、はては其の家より逐ひ出されたり」。

謹、「玄かも彼の人は信者なりしと覺ゆ」。

慈悲、「その通りなり。げに當世は斯かる類ひの輩儕にて充ち滿ちたり」。

さて基督女信者の總領息子なるマタイはゆくりなくも病氣に冐さ

れ、時々痙攣を起して胸の痛むこと激しかりけり。されば此の界隈にて評判よき熟練と云へる老醫を招き、其の診察を求めたりしに、老醫は部屋に入り來りて先づ病人を診察し、やがて此の病氣の食傷なることを見定め、其の母に尋ねけるやう、「此の頃マタイどのは如何やうの物を喰べられしぞや」。「格別之れと云ひて良からぬ物は喰べしことあらず」。「此は何か消化難くして胃の腑に落ちぬ物あるべければ、早く潔むること肝心なり、此の儘に爲し置きては容易ならぬ事となるべし」。

其の時サムエルは傍らより言葉を挾み、「母人よ、先つ頃此の道の入り口なる門のほとりにて、左り手の果物園より珍らしき木の實の枝垂れ居たるに、兄上は之れを摘りて喰べられたり、あの木の實は何なりしやらん」。

基女、「げに左る事ありたり、我身の制するをも聞かで之れを喰べぬること、思へば惡戯にも程こそありつれ」。

熟練、「さもあるべしと見定め置きたり、夫れこそ極はめて良からぬ食物にて、彼の實は最と有害なるベルゼブル園の菓物なり。元來之れが爲め命を落す者數多かるに、誰とて卿たちを注意せざりしとは訝かしき次第なり」。

其の時基督女信者は聲を揚げ、「あゝ我が子の爲め何とかせん、其の惡戯は左もあらばあれ、我身の不注意こそ責むべけれ」、と云ひて打ち泣きたり。

熟練、「さのみ力を落すことかは、唯だ吐きて潔むることをせしめば、子供は頓て治るべし」。

基女、「君よ、價に搏はず、何卒充分に療治して給はれかし」。

熟練、「いや、我身は法外なる價を望む者ならず」。

かく云ひて先づ潔めの療法を施こせしが、其の効能は最と弱かり

(ヒ)希伯來九ノ十三ノ十九全

けり、尤も之れに用ひたるは彼の羊の血、焚ける牝犢の灰、また牛膝草の汁などなりしなり。其の時老醫は其の潔めの効能弱きを見て、更に他の薬を調りたり。此はキリスト丁幾およびキリスト越幾斯の配劑にて、之れに約束の一匕二匕ばかりと、適宜の塩とを加へて丸薬となしたる者なり、之れを一度に三粒づゝ用ひ、悔改の涙にて飲み下すべしとの事なりけり。

(ヒ)希伯來十一ノ一

(モ)約翰六ノ五十四、希伯來九ノ十四、

(セ)馬可九ノ四十九、

(ス)撒加利亞十、ノ二十

さて此の薬愈よ調のひければ、之れを飲ませんと爲しけるに、子供は痙攣にて甚くも苦しみながら、猶ほ飲むことを嫌がりたり。老醫、「いざ〳〵之れを飲まれよ」。子供、「こは最と胸惡ろし」。母、「飲まさでは措かじ」。子供、「いやなり、我身は吐き出すべし」。其の時基督女信者は老醫に向ひ、「此は如何やうの味はひならん」、と云へば、老醫、「その味は惡しきこと無し」、と云ふに、婦人は自からの舌先きもて其の丸薬を嘗め試ろみ、さて其の子供に勸めけるやう、「のふ、マタイよ、此の薬は蜜にも勝りて最と甘し、いざ母の爲め、兄弟の爲め、慈悲の爲め、また卿自己の生命の爲めと思ひて疾く飲みてよ」。

斯くて種々に持てあつかひ、漸やう感謝して飲みけるに、其の効能著じるしく、忽ち其身潔まり、能く安み、能く眠り、また宜き程の汗して、苦痛も頓に怠りけり。またほどなく病床を離れ杖にすがりて家の内を行き廻り、謹慎、信心、仁愛などに遇ひては、その身の惡しき僻なる病氣より癒されたる事を語りたり。

さる程にマタイも既に平癒しければ、基督女信者は老醫に向ひ、「さて先生の御骨折には如何ほどの御禮をか致すべき」。

(イ)希伯來十三ノ十一、十五、

熟練、「卿は我が醫學校の主人に返禮すべき筈なり、其の仕方は書に記して定めある事なり」。

基女、「君よ、さるにても此の薬は他の用にも足るものにや」。

熟練、「此は萬能丸にて、旅の道中に起る一切の病に効くなり。若

(四)約翰六ノ五十一

し精製したらんには意外に長く保たるべし」。

基女、「さては之れあらば他の藥も要るまじきに、何卒十二袋ほども調へて給はれかし」。

熟練、「此の丸藥は病める者に効く如く、また豫防劑ともなるなり。げにや人若し常に此の藥を用ひ居らんには、其の人必らず限りなく生くべし。さり乍ら基督女信者どのよ、此の藥を用ふる時は我身が興ふる處方書の通りせられよ、さらずば何の効能も無かるべし」。

老醫は斯く云ひて基督女信者を始め皆々に藥をあたへ、マタイには熟せざる菓物を喰はぬやう言葉を殘し、さて暇乞ひして歸り行きたり。

さて先きに云へる如く、謹慎は子供たちに向ひ、何なりとも有益なる事に就きて尋ねなば、喜こびて敎をなすべしと云ひ置きけることなり。

されば此の時彼のマタイの問ひ出でけるやう、「およそ藥の口に苦きは何故ならん」。

謹、「是れ情慾深き心に取りては、神の語と其の力との苦々しく感せらるゝを表はすなり」。

マ、「藥は善き事をなすものなるに、何とて潔めを促がし、また吐氣を催さしむるならん」。

謹、「是れも亦、語の力ある作用が、人の情と心とを淸むることを表はすなり、げにや肉躰の上のことも、靈魂の上のことも、思へば變りたる事もなし」。

マ、「さて、火焰の天上に立ち上るを見、また日光の華やかに下界を照らすを見ては、如何なる事をか學ぶべき」。

謹、「されば、立ち上る火焰によりては、我らも熱く燃ゆる望によりて天に上るべきことを學び、また日輪の下界に熱と光と妙なる恩

化とを送る狀は、之れを最と高きに在して、猶ほ人の心に愛と恩惠とを送り給ふ我が救世主に擬らへつべし」。

マ、「さて彼の雲は何處より其の水を得るならん」。

謹、「海よりなり」。

マ、「それにも學ぶべき事ありや」。

謹、「是れ道を敎ふる者の、其の知識を神より得る姿なりとも云はまし」。

マ、「雲の地上に其の水を降りそゝぐは何故か」。

謹、「是れ道を敎ふる者の其の善ふる神の知識を、悉く此の世に分ち與ふべきを表はすなり」。

マ、「太陽によりて虹の生ずるは如何にぞや」。

謹、「是れ神の契約のキリストに依りて成就する兆なり」。

マ、「地中より泉の出で來るは如何に」。

謹、「是れ神の恩惠のキリストより出で來ることを表はすなり」

マ、「高き山の頂上にも泉あるは何故ならん」。

謹、「是れ恩惠の靈の高きにも低きにも、弱きにも强きにも、隔てなく到らぬ隈なきを表はすなり」。

マ、「何とて火は蠟燭の心につきて燃ゆるならん」

謹、「是れ我らの心の上に恩惠の火の燃ゆることなくば、眞實なる生命の光り絶えて我らに有るまじきことを表はすなり」。

マ、「蠟燭の火を保たんためには蠟も心も皆な費やさる、其の故如何にや」。

謹、「是れ我らの中にある神の恩惠を善く保存せんため、我らが身も魂も皆な用ひ盡すべきを表はすなり」。

マ、「さてペリカンと云へる大鳥は、己が口嘴にて其の胸を突き破るとかや」。

謹、「是れ其の血しほをもて己が雛を養なはんとする者にて、之によりてキリストが其の民を愛しみ給ふ聖意をも學ぶべきなり」。

マ、「庭鳥の鳴くを聞きては、如何なる事をか悟るべき」。

謹、「先づペテロの罪と其の悔改を想ひ起すべし。また鷄鳴曉を催すこもありて、之れを聞かば世の終末なる恐るべき審判の日近づけりと思ふべし」。

さる程に、滯在の月日も多く重なりぬれば、人々今は暇乞ひして打ち立たんと云ひ出でけり。其の時ヨセフは母に向ひ、「先づ彼の釋義者の家に使を遣り、大勇ぬしの重ねて遣はさるゝやう懇願して見られよ」、と云へば、「和子よ、よくこそ氣づきたれ、我身は大かた忘れなんとしつ」、と云ひつゝ門衛守護に賴み、人して此の由を申しやりけるに、やがて承知の旨返り事ありたり。

さて愈よ出立の支度とゝのひければ、此の家の人々皆な打ち集ひて送別と感謝の會を催しけり、其のこと了りて人々基督女信者に向ひ、「此の家の習はしにて卿たちに見すべきものあり、之れを見置きて道中の思種ともせられよかし」、と云ひつゝ唯或る戸棚を開き、彼のエバの食ひたりと云ふ林檎の實を示し、また其の夫アダムにも之れを分ち、且つ共に之れを食したるにより、エデンの樂園を逐はれたることなど語りて、さて孰れも之れに就きて如何に思ふぞやと尋ねたり。

（創世記三ノ一、六、羅馬七ノ二十四、）

次に人々を唯或る處に連れ行きて、ヤコブの梯子を示しけるが、折しも數多の天の使ありて其の上を昇り居たり。されば基督女信者を始め人々皆つく〴〵と其のゝぼるさまを打ち眺め、瞬きもせで見まもりたり。やがて又他の場所に行かんとしけるに、かのヤコブは其の母に向ひて、「何卒今暫らく此處に留まりてよ、此は最と珍らしき有樣なるに」、と云ひければ、げにもとて再た立ち止まり、此の快

（創世記二十八ノ十二、）

（約耳三ノ十六、番伯來六ノ十九、）

よき景を見て其の眼を慰さめたり。

やがて愈よ次の場所に行きけるが、此處には、一とつの金製の錨懸けられありたり。「此は卿たちに取りて無くてならぬ者にて、常も目先きを離さず懸け置くべく、かくて空模様惡しき時は確く之れに依りて立つべきなり」、と云はるゝまゝに、基督女信者は之れを取りおろし、皆々打ち眺めて喜こびたり。

次には山の上に連れ行かれしが、此は我らの先祖アブラハムが其の子イサクを献げたる處にて、今日まで傳へ殘れる壇や柴薪や火や刀やなど有りたり、されば人々之れを見て甚く感動し、「げにアブラハムこそは身を忘れて其の主に忠を盡せし人なるかな」、と噂し合へり。

さて斯かる事ども皆な見せ終れるとき、謹愼は人々を食堂に伴なひ行き、備への一絃琴を取りて節ゆかしくも歌ひ奏でたり。

なつかしの
子ゆゑにも
君にまことを
たましひの
望てふ
あらしの夜にも
罪の實を
女の先祖の
おもひやるだに
折しもほと〳〵と門べを音なふ者あるに、門衛出でゝ戸を開けば、是れ別人ならで大勇なりけり。されば人々見るからに勇み立ち、先きに其の助けにて獅子の難をも脱れ、また彼の殘忍坊の血塗入道を殺したる手並など、今更のやうに鮮やかに思ひ浮かべて、みな悅こ

親ごゝろ
まよはで
さゝげぬる」。
錨は
星かげ
亂れじな」。
味はひし
面かげ
憂たてしや」。

ぶこと限りなし。

其の時大勇は基督女信者と慈悲に向ひ、「我が主は道中の氣晴らしにもとて、卿たちに石榴の實や、やきパンや、また良き飲料などを遣はさる、また子供たちには甘き乾菓物を下さるゝなり」、と云ふ。

さる程に、人々愈よ發足の支度を爲しけるに、謹慎と信心とは見送りすとて連れ立ちたり。さて門に至りて門衛に向ひ、此の頃通るものも無かりけるにやと尋ねけるに、門衛の答ふるやう、「されば、先つ頃唯だ一人見受けたり、また其の人の云ひけるには、近頃此の街道筋にて恐ろしき盜難ありたる由、されど盜人どもは皆な捕はれて、やがてお仕置に遇ふべしとの事なり」。

基督女信者と慈悲は之れを聞きて恐れけるが、マタイは獨り頭を打ち振り、「母人よ、何の恐るゝことかは、大勇どの、我等と共に行かるゝ限りは」、と云へり。

基督女信者はまた門衛に向ひ、「さて、此の家に參りてより、永々の間盡きせぬ親切を蒙むりたり、また幼なき者らも卿の情を受けたること最と深きに、いかで報い申すべき程をも辨まへず、此は輕少にてまことに失禮しけれど、寸志の印ばかりに受けられよ」、と云ひて、金天使を一個其の手に渡してけり。されば門衛は叮嚀に禮を返し、さて、『汝の衣服を常に白からしめよ、汝の頭に膏を絶えしむるなかれ』、と口ずさみ、また子供たちには、『なんぢ幼少きときの慾を避けて、義と信と愛を追ひ求め、また清き心にて主を籲ぶ者と和らぐ事を追ひ求むべし』、と云へり。かくて皆な此の門衛に謝し、愈よ此處を立ち出でたり。

㊀金天使とは古今東西の國にて通用する金貨の名なり、

㊁傳道者、九ノ八、

㊂提摩太後書、二ノ二、十

第五程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
あまつみそのゝ春をしぞ思ふ。

さて我れ夢の中に見けるに、人々は愈よ進みて遂に峠の降り口に達してけり。其の時信心は忽ち何事をか思ひ出でたりと覺しく、「あゝ、我身は各自方に進らすべき物を打ち忘れたるに、いで、急ぎ行きて取り來らん」、と云ひ捨てゝ、元と來し方へ急ぎ行きたり。折しも程近き右方の森の中より、

「過ぎ越し方に　あまる恩惠、
思へば嬉れし、
ゆくすゑ永久に　住まばや神の
うるはしの家」。

と最とも妙なる歌の一と節の聞ゆるに、訝かしみつゝ尙ほ聞きてあれば、また他の聲して此の歌に答ふる者あるやう聞ゆ、

「何にかくらべん　そのいつくしみ、
其のまことをば　何にか類ぐへん、
たふとしや　わが神
どこしへに　うるはし」。

されば基督女信者は振り返りて謹愼に向ひ、此の妙なる歌の主を尋ねけるに、彼の處女の答へけるやう、「此は此のわたりの小鳥の啼く聲にて、もろ〳〵の花の地に現はれ、照る日長閑に暖かなる頃は、日ねもす斯く歌ひ續くれども、其の餘の時候にては之れを聞くこと最と稀なり。淋しき森も此の鳥ゆゑに懷かしき處となり、憂ひ悲しめるときには我らに取りて最と良き侶となる、されば我らは家に養

雅歌二ノ十一、十二

ひて倒ひ馴らすことをもし、また其の聲を尋ねては遠く逍遙をもすることなり」。

語り了れるときしも信心は歸り來りて、さて基督女信者に向ひ、「見られよ、我身は卿たちの爲めに一つの覺書を作り置きたり、此れには卿たちが彼處にて見られし事どもを殘らず書き留めあるなり、之れを進らすべければ、行く〳〵思ひ出で〻、道中の慰藉とも、また奬勵とも爲られよかし」、と云へり。

さて人々此の峠を下りて愈よ謙遜の谷に向ひたり、元より此の山路は最と嶮しくして滑ること甚だしかりけれど、いづれも深く用心してければ、やがて事も無く降り着きたり。其の時信心は基督女信者に打ち向ひ、「是れこそ卿の夫基督信者が曩きに惡魔なるアポリオンに出で會ひ、凄じき戰ひを爲しつるところなり。そは卿も定めし聞き及べることならん、されど斯く大勇ぬしの卿たちを護りて案内せらるゝ限りは、道中すべて安全なるべきに、皆々心を安んぜられよ」、と云ひ終りて互ひに挨拶し、やがて別れて歸り往きけり。

其の時大勇の云へるやう、「此の谷にては自から招く者にのみ禍の來ることなれば、卿たちは左まで恐るゝにも及ぶまじ。げにや基督信者はアポリオンに出で會ひて、手痛き戰かひを爲しつることなるが、是れ全くみづから招きたるにて、實は彼の峠を降るとき幾度か滑りたる結果なり。およそ彼處にて足踏み滑らしたらん者は、是非なく戰かひを覺悟すべき筈なり。さればこそ人々は此の谷を最と六ケしき處とは云ふなれ。また何人にても、何處かにて恐ろしき目に遇ひし者ありと聞かば、人々は直ちに說を爲して、其の場所には妖怪變化のもの出沒すなど云ひ囃すこと普通なれど、實は全く疑心暗鬼の類ひにて、多く自から招き求めたるなり。此の謙遜の谷とても實は其の地味豐かにして、鳥も喜こびて囀する處なり。それは扨て

措き、此のわたりを能く探りなば、かの基督信者の難儀に出あひぬる事共につき、何か紀念ともなるべき物の、何處かに在る筈なり」。

云ひも果てぬにヤコブは其の母を顧りみて、「見られよ、あれに立ちたる柱には、何やらん物書かれありと見ゆ、いざ、立ち寄りて調べ見ばや」、と云ふに、人々進みて之れを見れば、まことや、『是れ警戒の柱なり、其の道にて足踏み滑らし、從がつて此處に手痛き戰かひを爲しつる基督信者を憶ふべし』、と讀まれたり。「見られよ、基督信者の難儀に出で會ひぬる紀念物あるべしと我が云へるは此の事なり」、と云ひさして案内者は基督女信者の方を振り返り、さらに言葉を續けて語りけるやう、「げにや此の峠は、世の多くの山阪とは其の趣むき全く異なりて、登ることの困難に比ぶれば、下ることの困難は又一段なり。されば誰しも同じ憂き目を見ることにて、基督信者をのみ責むべきにあらず、彼の人今は安らかに在ることなれば、其の過失を數ふるに忍びず、ましして此處に戰かひて、潔ぎよくも其の敵に勝ちぬるをや。我らは唯だ仰ぎて主の御保護をこそ祈るべけれ。尙ほ重ねて此の謙遜の谷の事を云はんに、此はまことに地味豐かなる處にて、見らるゝ如く、草生ひ茂れる綠の牧場最と多かり。誰にても我らのごとく此の時節に來りなば、必らず其の眼を悅こばさずと云ふことあらじ、あゝ谷間は充ち渡れる綠の色の濃やかなるに、百合の花の今を盛りと咲き亂れたる、其の景の麗はしさ如何ばかりぞや。『それ神は驕傲者を拒ぎて謙卑者に恩を與ふ』、ともあることにて、我が知れる働らき人の中にも此の謙遜の谷に良き領地を恩み與へられたる者少なからず。まことに其の土地實のり肥えて豐かなること量りなし。されば此の處より直ちに父の家に至るべき道もがな、かくて道中此の上の困難を脫れてましと欲ふ人たちも有ることなれど、さりとて道は道なり、之れを行き了ふせてこそ望む極に

(天)雅歌二ノ一、(ル)雅各四ノ六、彼得前五ノ五

も達すべけれ」。

さて斯く語らひつゝ人々進み行きける折しも、一人の牧童ありて其の父の羊を飼ひ居るを見たり。此の童その身には最と粗末なるものを纏ひ居れど、其の顔たちは品良くして潔よし、今しも唯だ獨り坐り居て、何やらん一と節歌ふところなるに、大勇は人々を顧りみて、暫らく其の云ふところを聞かれよと云ひ含めたり。

「倒れしものに倒れなく
低きは落つる虞れなし。
重荷は旅の障りにて
身の輕きにぞ氣は安き。

何を衣、何を食はんと
思ひ煩らふ節も無し。

何を著、何を食はんと思ひ煩ふ節も無し

THE SHEPHERD BOY'S SONG
'And as he sat by himself he sung.'

[see p. 240.

も連すべけれ」。

さて斯く語らひつゝ、人々進み行きける折しも、一人の牧童ありて其の父の羊を飼ひ居るを見たり。此の童その身には最と粗末なるものを纏ひ居れど、其の顏たちは品良くして潔よし、今しも唯だ獨り坐り居て、何やらん一と節歌ふところなるに、大勇は人々を顧りみて、暫らく其の云ふところを聞かれよと云ひ合めたり。

「倒れしものに倒れなく
低きは落つる虞れなし。
重荷は旅の障りにて
身の輕きにぞ氣は安き。
何を衣、何を食はんと
思ひ煩らふ節も無し。

何を着、何を食はんと思ひ煩ふ節も無し

THE SHEPHERD BOY'S SONG
'And as he sat by himself he sung.'

[see p. 246.

なほ祈りても　我が心
足るを知らばや　物ごとに」。

其の時案内者の云へるやう、「あれを聞かれよ、我れ思ふに此の童こそは其の胸に安心草と云へる心根を蓄はへ、絹布や天鵞絨を衣飾りたる人に勝りて、迢に樂しき生涯を送るものならめ。それは扨て措き、又前の談を續くべし。

さるにても、此の谷には其往時我が主の別莊ありて、主は多く此處に在ることを愛し給へり、又その空氣の爽やかなるまゝに、好みて此の牧場を逍遙し給ひしことなり。元より世は到る處騷々しく亂れがはしけれど、唯だ此の謙遜の谷ばかりは、遠く浮世の塵を離れ、物みな靜かにして心澄ますと云ふことなし、去かも此の谷は唯だ旅人の生涯を愛する者のみ通行する處にてあるなり。又かの基督信者がゆくりなくもアポリオンに出で會ひ、傷ましき目を見つるは左る

(オ)何西阿十二ノ四、五、(ワ)馬太十三ノ四十六、(カ)箴言八ノ三十五

ことながら、實は此の處とても昔しは人々天の使たちに出で會ひ、また値高き眞珠を見出し、また生命の語をも見出しなどせし處なり。

其の往時我が主が此の處に別莊を有せられ、好みて此處に逍遙せられしことは既にも云へり、それに猶ほ加ふべきことあり、そは此の土地を愛し慕ふ人々の爲め、主が殊更に備を殘したまひて、此の人々の道中の費用を支へ、また其の旅路を勵まし給ふことなり」。

さて進み行く程に、サムエルは大勇に向ひ、「君よ、見渡す限り此の谷は最と廣かるに、さても我が父のアポリオンと戰かひたりと云ふは何の邊ならん」。

大勇、「されば、卿の父がアポリオンと戰かひたりと云ふは、丁度忘勝の青野と云へる邊にて、あれ〳〵向ふに見ゆる小徑の處なり。まことや、彼處は此の界隈にて極めて劒呑なる場所にて、ほかの人々も隨分難儀せし處なり。尤も何時にても旅人が斯かる戰かひに出で會ふは、其の受けたる祝福を忘れ自から輕んずる時にてあるなり。猶ほ委しき事は彼處に着きて語ることにせん、彼處には當時の戰かひを紀念する石碑もあり、また其の戰かひの痕跡も今日まで殘り居る者あり」。

(ヨ)雅歌七ノ四、(タ)詩八十四ノ六、七、(レ)何西亞二ノ十五

其の時慈悲の云へるやう、「あゝ、此の場所は我が靈魂に取りて最と相應はしき心地す。妾は馬や車の馳せちがふ音に遠ざかり、靜かに坐りて身の越し方や行く末を思ひ、また大君の召を蒙むれる仔細などを、落ち着きて考ふることを好むなり。斯かる處にてこそ、人は深く思ひて心を碎き、其の魂しひ融け和らぎて、其の眼もヘシボンの池の如くに澄み渡らめ。また『かれらは涙の谷を過ぐれども其處を多くの泉あるところと爲す、また前の雨はもろ〳〵の惠をもて之れを掩へり、彼らは力より力に進み遂におの〳〵シオンに至りて神に見ゆ』、ともあるは此處のことなるべし。此の谷は又大君が彼の

葡萄園を與ふと云へる處にて、之れを往き通ふ者は、皆な基督信者の如く歌ふべからん」。

大勇、「まことに云はるゝ通りなり。我身は幾度となく此の谷を過ぎて、此れほど善き處は又とあるまじと思ふなり。また我身が嚮導しつる數多の旅人たちも、皆な同樣に云はれつるなり。元よりエホバの聖語にも、『我は唯だ苦しみ、また心を傷め、我が語を畏れ戰く者を顧みるなり』、とあるならずや」。

さて愈よ前に云へる戰かひの場所に着きければ、案内者は基督女信者を始め、人々に打ち向ひて、「見られよ、此處が基督信者の立ち場にて、あれなる高みよりアポリオンは攻め掛かれるなり。また此の石の上に亂染めるは、卿の夫の流せる血しほにて、その痕跡實に今日まで殘れるなり。また此處彼處に落ち散りあるは、當時アポリオンが投げ掛けたる火矢の矢柄なり。また側に杖打たれて此の岩の微塵に碎けたる處や、此の地面の斯くまで踏み荒らしある處を見れば、互ひに立ち場を爭そひて、鎬を削りたる狀も思ひやらる。まことや基督信者の男らしくも擧動ひたるは、彼の大力無雙のヘルキユレスにも類へつべく、やがてアポリオンは打ち敗けて彼方の谷に逃げ入りたり、此は死の蔭の谷とぞ云ふなる、我らも程なく之れに入るべし。またあれに立てる石碑を見られよ、是れ基督信者を紀念する者にて、其の譽れは末永くも傳はるべし」、と云ひつゝ、人々を導びきて其の下に至り、次の言葉の刻まれあるを示してけり。

「あゝ是れや此の旅人の
奇しき戰爭の　ありきてふ
昔し去るべの　石の碑、
見よ、勇ましく　戰かひて
惡に勝ちたる　丈夫の

ほまれぞ永く　殘るなる」。

さる程に、此處をも通り過ぎて、やがて死の蔭の谷堺に着きけり。此の谷は前の谷よりも其の道程長くして、然もさま〳〵の不思議なる惡しき者出沒せり。されど折好くも晝間のことにはあり、況して大勇を其の案内者に賴み居ることなれば、此の婦人たちや子供たちも、みな何氣なく其の中に入り行きたり。

さて愈よ此の谷に入り行けば、先づ死に際の人の甚くも唸るが如き聲聞こゆる心地す、また恨めしげに哭き呻く聲なども聞ゆるやう覺えけるに、早や子供たちは身ぶるひして怖ぢ惑ひ、婦人たちも顏の色を失なひけるが、去かも大勇は事ともせず、先きに立ちて皆々を慰さめ勵ましたり。

かくて又少しく進み行けば、宛ながら土地も落ち込むべくやと思はるゝ計り打ち震ふ個所あり、それに連れて姿は見えざれども、大蛇などの走り寄る如き音聞こゆ、斯かりしかば子供たちは口々に呼ばゝりて、「あゝ我らは何時まで此の凄まじき場所に在ることぞや」、と云ふに、案内者は猶ほも之れを慰さめ勵まし、「いづれも足もとを用心せられよ、さらずば思ひ掛けなき罠に落つべし」、と云ふ。

折からヤコブは、恐怖より疲しくて、ゆくりなくも病氣を發しければ、その母は先きに釋義者の家にて貰らひ受けたる飲料を取り、また老醫熟練の調りたる丸藥三粒に合はせて呑ませけるに、やがて其の心地常に復したり。それより又進みて谷の中程に着きける時、基督女信者は忽ち聲を揚げて、「あな凄まじ、此の路ばたに見も知らぬ變化の姿の見ゆるやう覺ゆ」、と云へば、ヨセフも亦叫びて、「あれは何ならん、母人よ」。「あな凄まじ、あな凄まじ」。「その凄まじさ何にか比べん」。「あな凄まじ、比ぶべき者もあるまじ」。「あれ〳〵次第に近づきぬるよ」。「げに何とせん、早や近づきぬるよ」。

（ツ）雅各四ノ七、

（テ）彼得前五ノ八、九、

其の時大勇は言葉を勵まし、「誰にても恐るゝ者は我身に確かと寄り添はれよ」、と云ふ間もあらせず、早くも彼の惡鬼の進み來るを、物々しやと計り立ち抗へば、彼の者やがて寄るよと見えて、忽ち搔き消す如く消え失せたり。されば人々之れを見て、『惡魔を拒げ、然らば彼れ爾曹を逃げ去らん』、とあるをも思ひ合はせてけり。

かくて稍や元氣づきて、又もや行程を急ぎけるが、幾程もなく慈悲は後ろの方を振り返りて、其の形宛ながら獅子の如きもの、猛然として從がひ來るを見たりと覺ゆ。其の者凄まじき吼ゆる聲を有ち、吼ゆる度に谷間をゆるがせて、甚くも人々を恐れしめたり。されど大勇のみは之れをも物の數ともせず、先づ旅人たちを遣り過ごして自から殿りとなり、獅子の近づき來るを待つて、禦ぎ戰かはんと身構へたりしに、獅子は其の決心の狀を見て早くも後べに引き退ぞき、再たび近づくこともあらざりけり。

（ナ）箴言十四ノ十、

さる程に、人々又も案内者を先きに立てゝ進み行きけるが、間も無く一つの落し穴ありて道幅一つばいに横たはれる處に着きたり。之かも暗黑と濃霧と忽ち掩ひかゝりて咫尺を辨ぜず、更に越え行くべき便宜とても無かりけるに、旅人たちは歎息して、「あゝ、我ら今如何にかすべき」、と云ふ。されど案内者は猶ほしも之れを勵まし、「恐るゝことかは、唯だ靜かに立ちて、事の成り行きを窺がひ見られよ」、と云ふまゝに、人々は唯だ途方にくれて佇立み居たり。其の時惡しき者の騷ぎ狂ふ物音など一層あきらかに聞こゆる心地し、また穴の中より立ち上る黑煙りや火焰なども益々凄まじく見えぬるやうなり。されば基督女信者は慈悲に向ひて、「今となりて我身は亡夫の憂き節を思ひやるなり、元より此處に來りぬることは今が始めてなれど、此の谷のことに就きては屢々之れを聞きたり、ことわざにも、『心の苦みは心みづから知る、其の喜こびには他人あづからず』、

ともありて、いにしへより此の死の蔭の谷につきて語れる人は多かれども、自から親しく之れに入りたる者ならでは、とても其の意は知り難からん、さるにても唯ひとり夜途を踏みて此處を通り、玄かも群がる惡鬼に取りかこまれて、隙もありなば寸々に引き裂かれんばかりなりしと聞く、思へば我が夫の傷はしさよ。げに此處に在るは凄まじくも恐ろしき事ならずや」。

（イ）以賽亞五十ノ十、

大勇、「あゝ我らの難儀到來せり、たとへば和田つ海の眞中を潛り、或るは山の底に沈み行かなんも斯くやあるべき、宛ながら天地も八方塞がりたる心地す。されど『暗を歩みて光りを得ざるとも エホバの聖名を頼み、おのれの神にたよれ』、ともあることなり。我身は元より幾度か此の谷を往來して、之れに勝さる難儀にも出會ひぬれど、玄かも見らるゝ如く今なほ無事なり、さりとて我身には誇るべきことあらず、唯主の救助を信じ頼みたるに依るのみ、然らば、いざ、諸共に神に祈り、此の暗黑を照らし、また凡ての惡魔を追ひ拂ふべき天の光明を願ひ求めん」。

かくて人々大聲に祈り呼ばゝりしに、神は光明と救助を與へければ、やがて無難に此の坑ある處を通り越したり、されど猶ほ此の谷を越え終れりとにもあらざれば、愈よ行程を急ぎて進みけるが、進むに連れて何やらん胸わるく惡しき臭氣襲ひかゝりて、其の煩らはしさ最と堪へ難し、されば慈悲は基督女信者に向ひて、「さきに立ち寄りぬる片折戸や、釋義者の住居や、また最後に宿りぬる家のことなどを思へば、此のわたりの氣味惡るさ猶ほ彌や更に堪へ難し」、と云ふ。

其の時子供たちの一人云へるやう、「さりながら、唯だ通り行く丈けならば、此處とても中々惡しきことはあるまじ、そは斯かる處を過ぎて後にこそ、我らの行き着くべき處は一としほ心地よくも思は

るべければ」。

大勇、「宜しくも云ひたり、サムエルよ、それこそ大人にも恥ぢざる云ひ分なれ」。

サム、「我身再たび此處を出ることを得んには、一層善と光明の道を敬ひ慕ふべしと思ふなり」。

大勇、「我らは軈て此の谷を出づべし」。

かくて又進み行く程に、ヨセフは聲を揚げて、「谷の極は未だ見えざるにや」、と云へば、大勇は振り返りて、「先づ足もとの用心をせられよ、之れよりは圈套多き處なるに」、と云ふ。されば人々みな其の足もとに意を用ひて進みしが、まことや圈套夥多しくして足の障り繁かりけり。をりしも一人の男の、其の身悉く裂き破られて、左方なる溝の中に捨てられあるを見たり。其の時案内者の云へるやう、「あれは輕卒と呼びて此の道に志ざしつる者なるが、今は見らるゝ姿にて久しく彼處に在ることなり。彼の者の殺されぬる時、其の連れ人にて注意と云へる者ありしが、此は惡魔の毒手を脱かれたり。およそ此のわたりにて殺されぬる者、その數如何計りなるや云ひ難し。されども人々は猶ほ輕々しく此の旅を企だて、去かも案内者をさへ頼まで出で立つことなり。さるにても彼の基督信者どのゝ、此處を無難に通り過せしは、殆んど不思議とも云ふべけれど、彼の人は自からも雄々しき心を有ち、且つは神より殊更なる恩寵を蒙むり居たるなり。さも無からんには必らず忌々しき目にもこそ逢ひたるならめ」。

さて人々進み行きて漸やく此の谷の盡くる處に近づき、今しも囊きに基督信者が見たりける彼の巖窟の邊りに來れる時、ゆくりなくも一個の巨漢に出で會ひたり。此は異端をもて多くの年若き旅人を打ち碎くにより、その名を大槌入道とは呼ぶ者なるが、彼れ忽ち大勇

を呼び掛け、さて大聲に罵しるや、「いかに、斯かる事を爲すべからずと汝に命じたること幾度ぞや」。

大勇、「斯かる事とは何事ぞや」。

大槌、「何事ぞやとは何事ぞや。汝、何事なるか知れる筈なり。物も面倒なり、いざ、汝を片付けくれん」。

大勇、「先づ戰ひの理由を明白にし、其の上にて勝負を決すべし」。

婦人や子供たちは此の有樣を見て、爲すべきすべも辨まへず、唯だ打ち震ひて佇立み居たり。

大槌、「汝は我が領分を侵し、最とも惡たれたる盜み方を爲すなり」。

大勇、「そは餘り漠然たる云ひ分なり、汝、先づ要領を語れ」。

大槌、「平たく云へば汝は拐帶者なり、婦人や子供たちを集めて、見も知らぬ國に連れ行き、かくて我が主君の王國を危ふくせんとは爲るなり」。

大勇、「言も愚かや、我れは天つ大神の從者にて、罪人を說き勸めて悔改めに導びくこと我が役目なり。げに我れは命を蒙むりて凡ての人を暗黑より光明に導びき、またサタンの手を離れてエホバの手に付かしめんと勵み勤むるなり。若し之れが爲めに汝と戰ひ爭ふべくば、いで、速やかに雌雄を決せん」。

云はせも果てず巨漢は、手に頭太の棍棒を取りて進み來るに、大勇も其の劍を拔きて立ち對ひ、左右なく戰ひを交へしが、玄かも巨漢は劇しく其の棒を打ち振りて、玄たゝかに大勇を擊ち据ゑたり。

されば婦人子供たちは之れを見て、大聲揚げて哭き惑ふ、時に大勇は確たか打たれて片膝はつきながらも、忽ち自から元氣を起して奮ひ立ち、勇ましく打つて掛りて巨漢の二の腕深く斬り付けたり、かくて烈しく戰ふこと一と時あまり、大槌入道の鼻息は熱氣を吹きて、宛ながら沸ぎれる藥鑵の湯氣にも似たりけり。

大勇勇を奮つて異端の敵を屠る

DEATH OF GIANT MAUL

'With that the giant began to faint, and could hold up his club no longer. Then Mr. Great-heart seconded his blow, and smote the head of the giant from his shoulders.'

[see p. 254.

其の時雙方戰ひ疲れて暫らく別れ憩ひしが、大勇は先づ跪まづきて祈禱を捧げたり。元より婦人子供たちは猶ほ如何にとも詮方なくて、且つ泣き且つ歎息を漏らし居たり。

やがて又休息果てゝ雙方立ち對ひ、再たび戰ひを交へしが、此の度は大勇唯だ一擊にて、彼の巨漢を擊ち伏せたり。巨漢は倒れながらに聲を掛け、「待て、待て、今一と勝負」、と云ふ。されば大勇は打ち寛ろぎて之れを許し、其の起き上がるを待ちて、更に烈しく渡り合ひたるに、入道いらつて打ち下ろす棒の一と振りに、あなや大勇の腦天は微塵となつて碎かれんかと見られたり。

かくと見るより大勇は早くも身を交はし、滿身の勇氣を振ひて、ッと巨漢の手元近く駈け寄り、第五の肋骨のあたりを柄も透れと刺し貫ぬきたり。之れにて入道は全く力おとろへ、再び其の棒を振ふことも叶はざるに、大勇重ねて之れを擊ち、終に其の首を打ち落し

其の時雙方戰ひ疲れて暫らく別れ憩ひしが、大勇は先づ跪まづき祈禱を捧げたり。元より婦人子供たちは猶ほ如何にとも詮方なくて、且つ泣き且つ歎息を漏らし居たり。

やがて又休息果て、雙方立ち對ひ、再たび戰ひを交へしが、此の度は大勇唯だ一擊にて、彼の巨漢を擊ち伏せたり。巨漢は倒れながらに聲を掛け、「待て、待て、今一と勝負」、と云ふ。されば大勇は打ち寛ろぎて之れを許し、其の起き上がるを待ちて、更に烈しく渡り合ひたるに、入道いらつて打ち下ろす棒の一と振りに、あなや大勇の腦天は微塵となつて碎かれんかと見られたり。

かくと見るより大勇は早くも身を交はし、滿身の勇氣を振ひて、ツと巨漢の手元近く駈け寄り、第五の肋骨のあたりを柄も透れと刺し貫ぬきたり。之れにて入道は全く力おとろへ、再び其の棒を振ふこともはざるに、大勇重ねて之れを擊ち、終に其の首を打ち落し

大勇勇を奮つて異端の敵を屠る

DEATH OF GIANT MAUL

'With that the giant began to faint, and could hold up his club no longer. Then Mr. Great-heart seconded his blow, and smote the head of the giant from his shoulders.'

[*see p.* 254.

たり。されば婦人や子供たちは之れを見て喜こぶこと限りなく、大勇も神を稱へて其の救助を悦こびたり。

斯く爲し了りて、人々は其の邊りに一とつの柱を立て、其の上に巨漢の首を懸け、また次の如く書き留めけり。

「見よ旅人を惱ませし
異端の鬼の髑髏、
我れ大勇の名に負ひて
之れを屠りぬ、勇ましく」。

第六程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
あまつみその〻春をしぞ思ふ。

さる程に、人々愈よ進み行きて唯或る小高き處に着きけり、此は旅人が其の前途を眺めん爲めの便宜にと殊更にきづき立てられたる處にて、曩きに基督信者が初めて其の友忠信の姿を見かけたる場所なり。さるからに、人々此處に落ち居て憩ひ休らひ、また危ふき敵より救はれぬる心祝ひに、飲みつ食ひつして互ひに喜こび悦しみたり。其の時基督女信者は案内者を勞はりて、若しや手傷にても受けはせずやと尋ねけるに、大勇は頭を打ちふり、「否とよ、唯だ我が肉の上に些さかの傷を負ひたるのみ、それとても我身の害とはならで、却つて我が益なり、そは之れに依りて今は我が主人と卿たちに對する我が愛を證すべく、また後々は恩に依りて我が報賞の増し加へらるべき資ともなりぬべければ」と云ふ。

基女、「さるにても、善き君よ、卿は彼の巨漢の棒打ち振りて卿に立ち抗へる時、恐ろしとも思はれざりしや」。

大勇、「あゝ、我身は己れの能力に頼らず、全く凡ての者に勝れ給ふ者に頼り恃むことを義務とするなり」。

基女、「されど、彼の者最先きに卿を擊ちて、それが爲め片膝をつかれし時、卿は如何にか思はれけん」。

大勇、「その時とても我身は唯だ主の聖旨に任せ居たるに、果して主は之れに勝ち給ひたり」。

其の時マタイも言葉を挾み、「卿たちの斯く喜こばしく語らるゝに付けて、我身は神の奇しき恩惠をゑみ〳〵と思ひ知るなり、先づ彼の

（ヘ）哥林多後四ノ十、十一、（ト）羅馬八ノ三十七、

谷より我らを助け出し、また此の敵の危難より我らを救ひ給へり、我ら今此の高き所より明らかに神の愛の證を見る、かくては唯だ一と筋にこそ我が大神に賴り恃むべきなれ」と打ち語れり。

やがて人々立ち上りて、又もや行程を急ぎたり。

さて、少し行きたる所に一本の樫の木あり、人々之れに近より見れば、一個の老いたる旅人ありて、其の樹蔭に熟睡し居たり。其の杖や服裝によりても其の旅人なること紛れなし。

さるからに案内者は進み寄りて之れを搖り醒ませしに、彼の老紳士は其の眼を見開き、やがて大聲に打ち叫びて、「何事ぞ、何事ぞ、汝は何者ぞ、何用ありて來れるぞ」と口走れり。

大勇、「さのみ急き込む事かは、老人よ、我らは皆な卿の友同士なるに」。

されど老人は耳にも入れず立ち上り、油斷なく身構へして、此の人々は何者やらんと心を配り窺ひ居たり。

大勇、「我身は大勇と名乘りて、此れなる旅人たちの天つ御國に行かるゝを道しるべする者なるが、卒爾は何卒容されよ」。

老人は之れを聞きて、「此は面目次第もなし、實は先きつ頃滿信者と云へる者、此のわたりにて盜賊の爲めに金錢を奪はれつることあり、若しや其の類の人達にはあらざるかと危ぶみたることなるが、今更能く見れば、卿たちは孰れも勝れて正直なる人々なりけり。何卒我身の失禮をこそ赦されよ」。

大勇、「さるにても若し我らにして其の類のものどもなりせば、卿は如何にして身を救はるゝ積りなりけん」。

老人、「如何にしてとや、されば、我が息の根の續く限り戰かふ積りなりしなり、かくて我が敗れを取らんことよもあらじ、元より基督信者たる者は、自から屈し弱らぬかぎり、決して他に負かさるべ

き者にもあらねば」。

大勇、「あゝ善くこそ云はれたれ、之れに依りて我身は卿の正直なるを知るなり、げに卿の云へる處は眞實なり」。

老人、「卿の爾云はるゝに依りて、我身は又卿が眞正の旅人を知る方なるを知るなり。然も大抵の者は基督信者はど意氣地なき弱蟲は無しと思ふことなるに」。

大勇、「嬉しくも邂逅ひぬる者かな、願ふは卿の鄕里と尊名とを漏らされよ」。

老人、「實は我が名は名乘りかぬれど、我が鄕里とては、滅亡の城下に程近き魯鈍の里なり」。

大勇、「さもありけるか、さらば我身は略ぼ卿を推量せり、卿は必らず正直老と云はるゝならん」。

老人は之れを聞きて顏打ち赤らめ、「正直とは及びも付かぬ事にて、たゞ正直とのみ名乘るなるが、實は此の名と我が性質の相應はんことをこそ願ふなれ。そは兎も角、我身が斯かる里より來ればとて、卿は如何にして我身を斯くも推量せられけん」。

大勇、「卿の事は先きに我が主人より之れを聞けり。されど彼の魯鈍の里は隣の城下よりも一層好からぬ處なりと云ふことなるに、斯かる處より善き人の出でたるを訝り居たり」。

正直、「さればなり、彼の地は太陽に遠く、從がつて人々の心冷たく無感覺なり。されど人若し氷の山に在りとても、若し一と度び義の太陽の其の上に照らすことあらば、其の心は必らず融くることを覺ゆべし。我身の上も實は其の通りなりしなり」。

大勇、「さなり、正直老よ、げに卿の云はるゝところ眞實なり」。

其の時老紳士は清けき愛の接吻もて人々を祝し、さて各自の名を尋ね、また道中の模樣などをも尋ねてけり。